

令和 5 年度
自己点検・評価報告書

鹿児島工業高等専門学校

目 次

自己点検・評価報告の概要	1
Ⅰ．各部署の重点項目における自己点検・評価報告	3
Ⅱ．ミッションに基づいた自己点検・評価報告	28

「令和5年度 自己点検・評価委員会」（外部評価委員会）

【概要】

本校では、以下に示すミッションを念頭に置き、国立高等専門学校機構の第4期中期計画に基づき年度計画をたて、様々な施策を実行している。また、当該年度の施策の計画、実行、点検・評価、改善のためにPDCAサイクル実施している。自己点検・評価委員会および外部評価委員会では、PDCAサイクルのC（Check）を行い、当該年度に実施された施策の評価および改善A（Action）を行っている。

～本校のミッション～

1. 創造性豊かで人格が優れた国際的に通用する技術者を養成すること
2. 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと
3. 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

本校の自己点検・評価は、以下に示す2つの大項目で行われており、自己点検・評価報告書に記載している。

I. 各部署の重点項目における自己点検・評価報告

II. ミッションに基づいた自己点検・評価報告

これらの2つの大項目は、内容が重複するところがあるものの相互補完的に、本校の自己点検・評価の充実度を高めることに機能していると考えている。特に、I. は本校の独自性のある自己点検・評価となっており、20の各部署からの重点項目の自己点検・評価を行っている。令和5年度末に開催された自己点検・評価委員会では、その評価および改善について委員長（校長）から複数の提案を受け、最終の取りまとめに反映させた。そのため、自己点検・評価委員会が、本校の自己点検・評価の統括および組織的な改善の中心的な役割を担っている。

また、令和5年度は、2年ぶりの外部評価委員会が開催された。令和3年度の外部評価委員会で指摘を受けた内容について回答を行い、この2年間で対応できたことを確認した。また、外部評価委員会では、新たな課題や指摘を受け、令和7年度の外部評価委員会で回答を求められることとなっている。

【総括】

令和5年度の自己点検・評価委員会では、令和3年度から実施している自己点検・評価におけるPDCAを着実に実行できていることが確認できた。各部署からの自己点検・評価報告について、委員長（校長）からの指摘を受け、次年度のActionを決定した。また、外部評価委員会では、校長からこれまでの鹿児島高専の課題（次ページ参照）を修正した内容が提示され、今後これらの課題について本校として取り組むこととなった。外部評価委員からは、本校が掲げている「Well-being」のコンセプトについて明確に定義し、それらを教職員・学生と共有しつつ施策を推進するように指摘を受けた。併せて、各施策における数値目標もできるだけ掲げて定量化された評価ができるように努力することを求められた。

令和8年度からは新学科への改組を行い、上記の指摘事項等を踏まえ、本校が学生、教職員、保護者、企業、地域等さまざまなステークホルダーに対しての責任を果たすと共に魅力的な学校となるよう様々な取り組みを行っていきたいと考えている。

鹿児島高専の課題

- Society5.0実現に向けた高専の方策
- 国際的に『魅力ある鹿児島高専』の実現
- 社会的課題を解決し、新たな価値を創出する教育・研究機関の実現
- 地域創生への貢献
- 変化に柔軟に対応できる組織の実現

中長期的課題

- 教育の質向上と改善
- 多様かつ優れた教員の確保
- 志願者の安定確保
- 学生支援・生活支援
- 国際性の涵養
- 地域連携
- 財政問題への対応

短期的課題

- 教育課程の再編
- 留年・退学
- 研究活動の活性化
- 科研費と外部資金
- 情報発信
- 情報セキュリティ対策の強化
- 教員評価の透明化
- 教職員の働き方

Well-beingを志向するエンジニア教育

- 自分自身のWell-beingを実現・向上
- 社会のWell-beingの実現・向上に貢献
- 従来の高専教育の領域を超えたリベラルアーツ教育の重視（再編・強化）

Well-beingな地域社会のための活動

- 地域課題の発見と解決方法の検討
- DXによる先端事例創出

学生のWell-being実現

- Supporting Students Dreams プロジェクトで学生の「やりたい」を応援
- ROBOGALS KAGOSHIMA, グローバルクラブ, 起業クラブ

教職員のWell-being実現

- 教員による自己点検票の改善
- 教職員の「やりたい」を応援する仕組み

Well-being

改組

- 1 学科体制へのシフト
- 機能強化基金による高度情報人材育成

科学技術イノベーション人材の育成

- 社会実装に向けた実践的学習強化
- リーダーシップの育成
- 開発型の研究力の強化
- 分野横断的能力の育成
- 企業との共同教育

ICT教育の高度化

- 最先端デジタル技術を用いた教育活動
- 企業とコラボした学びの場の提供
- 機能的なオンライン教育

志願者確保

- 早期STEAM教育
- 次世代リーダー枠入試（多様性拡大）

相互研修型による教職員の資質向上

- FD/SDフォーラム
- FD/SDレクチャーシリーズ
- 授業力アップアクティビティ
- 公開授業

グローバルエンジニア育成

女性技術者の活躍促進

リカレント教育の検討

I . 各部署の重点項目における 自己点検・評価報告

令和5年度 自己点検・評価委員会

概 要

本校では、国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画及び具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っている。また、その活動状況について自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っている。

令和5年度は、昨年度の編纂内容に準じて、

I．各部署の重点項目における自己点検・評価報告

II．ミッションに基づいた自己点検・評価報告

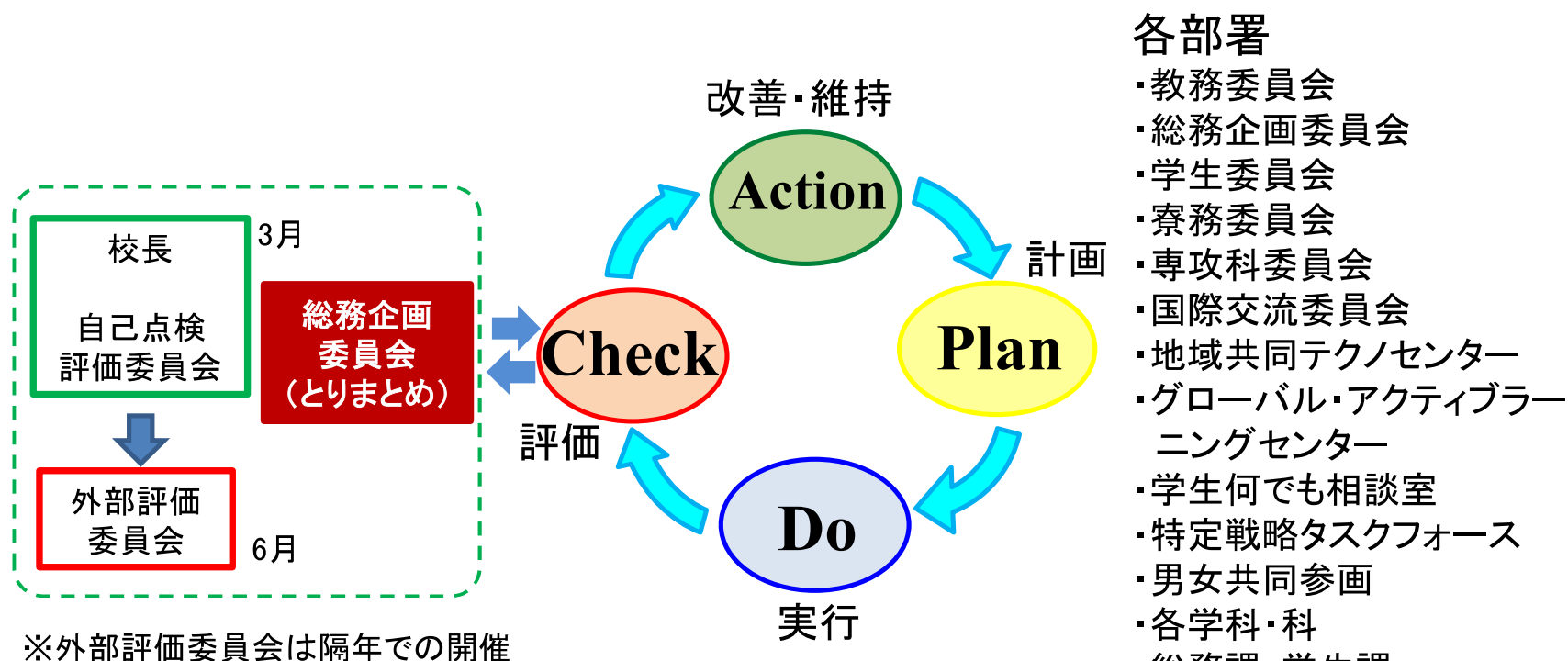
と2部に分けた編纂を行う。

令和2年度からの新たなPDCAサイクルによる自己点検・評価については機能的に行われていると考えているため、令和5年度については、上記以外の自己点検・評価に関する改善について特筆すべき事項はない。

報告内容

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1. 教務主事 自己点検・評価報告 | 12. 機械工学科長 自己点検・評価報告 |
| 2. 総務企画主事 自己点検・評価報告 | 13. 電気電子工学科長 |
| 3. 学生主事 自己点検・評価報告 | 自己点検・評価報告 |
| 4. 寮務主事 自己点検・評価報告 | 14. 電子制御工学科長 |
| 5. 研究主事・専攻科長 | 自己点検・評価報告 |
| 自己点検・評価報告 | 15. 情報工学科長 自己点検・評価報告 |
| 6. 国際交流センター長 | 16. 都市環境デザイン工学科長 |
| 自己点検・評価報告 | 自己点検・評価報告 |
| 7. 地域共同テクノセンター長 | 17. 一般教育科長 自己点検・評価報告 |
| 自己点検・評価報告 | 18. 総務課長 自己点検・評価報告 |
| 8. グローバル・アクティブラーニングセンター長 | 19. 学生課長 自己点検・評価報告 |
| ／ 9. 情報セキュリティ推進責任者 | 20. 技術長 自己点検・評価報告 |
| 自己点検・評価報告 | 21. 校長による自己点検・評価総括 |
| 10. 学生何でも相談室長 | |
| 自己点検・評価報告 | |
| 11. 特定戦略タスクフォース担当 | |
| 自己点検・評価報告 | |

自己点検・評価のPDCAサイクル



目標に対し、PDCAを回し、客観的なデータを基に
自己点検・評価を行う体制

自己評価基準

達成度と自己評価	評価基準
S: 計画以上に進行している	「目標以上の成果が得られている」、または「目標以上の成果が得られる形で進んでいる」
A: 計画通りに進行している	「目標通り100%の成果が得られている(ほぼ目標通りの成果が得られている形を含む)」、または「目標通り100%の成果が得られる形で進んでいる」
B: 計画からやや遅れている	「目標には届かなかったが、概ね70%以上の成果が得られている」、または「目標には届かないが、概ね70%以上の成果が得られる形で進んでいる」
C: 計画から遅れている	「目標の50%以上70%未満の成果にとどまっている」、または「目標の50%以上70%未満の成果となる形で進んでいる」
D: 計画から大幅に遅れている	「目標の50%未満の成果にとどまっている」、または「目標の50%未満の成果となる形で進んでいる」

1. 教務主事 自己点検・評価報告

教務主事の所管する事項	自己評価
(1) 新1年生混合クラスの問題点の把握 (2) 留年・退学に関する対策 (3) 志願者の確保(特に女子学生の確保)	A B A
Plan (1) 混合クラスにおける問題点を解決する。 (2) 前期終了科目で「不可」の科目については、全学的に早期の対応(再評価)を依頼する。再試験についても早い時期での実施を求める。 (3) バーチャルオープンキャンパスの見直しと、知ってもらうための工夫をする。積極的にイベントを開催する。入学試験における女子枠についても検討する。	Do (1) 転学科に関する申合せを決定して周知した。 (2) 前期終了科目で「不可」の科目について、全学的に早期(11月まで)の対応(再評価)を依頼した。 (3) コロナ禍の影響がなくなることによって積極的にイベントを開催する。入学試験における女子枠導入について検討した。
Check (1) 年度末近くになって転学科を希望する学生が数件でしており、希望転学科先に選考実施の可否を判断してもらった。 (2) 比較的、再評価に積極的に対応する教員が増えてきている。期間延長して数科目の再評価を実施できた。 (3) コロナの影響で中止してきた一日体験入学を今年度開催し、487名の参加者があった。オンライン開催していた学校説明会を対面とオンラインの併用で開催した。	Action (1) 学生便覧に申し出期限を掲載して学生にも周知する。 (2) 留年対策に係る学生支援のあり方について、今後、入学する学生の質の変化を考慮し、教員自らの授業力等の向上させる。 (3) Well-being教育の推進を図り、魅力ある学校とし、令和6年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。また、女子学生を広報に使うなどして、女子学生の確保も力を入れていく。

2. 総務企画主事 自己点検・評価報告

総務企画主事の所管する事項	自己評価
(1) 本校のキャリア支援実施状況を把握・整理し、入学時から卒業・卒業後までのキャリア支援の在り方を検討していく。 (2) 鹿児島高専FD・SDフォーラム、公開授業等の取り組みを含めて、充実したFD・SD活動を計画・実行する。 (3) 鹿児島市市電の窓吊り広告、高専PRビデオの制作等を計画・実行する。	S A A
Plan	Do
(1) 本校のキャリア支援実施状況を把握・整理し、入学時から卒業・卒業後までのキャリア支援の在り方を検討していく。 (2) 鹿児島高専FD・SDフォーラム、公開授業等の取り組みを含めて、充実したFD・SD活動を計画・実行する。 (3) 鹿児島市市電の窓吊り広告、高専PRビデオの制作等を計画・実行する。	(1) インターンシップ前講座とES講座を廃止した。新規にインターンシップ報告会、キャリア支援の日の外部講演、 KTCインターン を実施した。 (2) 鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズ、公開授業、授業アンケート、授業力アップアクティビティを実施した。鹿児島高専FDフォーラムでは、事務主催のイベントを行った。 (3) 前期、後期に各1回鹿児島市市電に広告を出した。高専PRビデオ～志学寮～を制作し、バーチャルオープンキャンパスで公開した。
Check	Action
(1) キャリア支援の計画と実績を把握し、新規支援プログラムを複数回実施し、委員会で報告した。また、そのことにより、充実化できた。 (2) 鹿児島高専FDフォーラム(5回)、鹿児島高専FDレクチャーシリーズ(1回)、公開授業(2回)、授業アンケート(2回)、授業力アップアクティビティ(1回)を実施について総務企画委員会およびFD・SD専門委員会において報告した。 (3) 6月26日～7月16日、11月13日～12月4日の期間において鹿児島市市電広告を行い、委員会で報告した。高専PRビデオ～志学寮～を委員会で報告した。	(1) キャリア支援実施状況の把握・整理を続けつつ、学生が主体的にキャリア形成活動に取り組むための支援の在り方を検討していく。 (2) 鹿児島高専FDフォーラムにおいて、授業紹介等を採用し、授業力向上に特化した内容のFDを新たに実施し、FDの充実を図る。 (3) 広報センターの広報・活動内容について、これまでの活動を前提としつつ、PR方法の改善を検討し、成果のある活動を行う。

3. 学生主事 自己点検・評価報告

学生主事の所管する事項	自己評価
(1)学生が意欲的に参加できる学校行事の実現 (2)学生会の見える化 (3)地域から愛される学校作り	S A B
Plan	Do
(1)学生がこれまで以上に意欲的に参加できる学校行事(文化祭・体育祭・クラスマッチ)の実施 (2)学生会活動の見える化を促進 (3)学校の美化活動と最も身近な地域貢献	(1)文化祭では、コロナ禍から始めた部活動が企画・立案する露店とコロナ前の飲食伴う露店募集 体育祭では競技のリニューアル(女子競技、保護者参加型) クラスマッチは、競技の見直し (2)学生会メンバーの活動であるという目印に腕章の導入 学生会活動の充実を図り、学生会便りの定期的発行 定期的な挨拶運動 放送活動(保健目標・部活動の活躍紹介・いじめ防止週間) (3)美化の一環として校内の花壇の管理とともに、覇者の像池の管理を行う。また、最も身近な地域貢献の一環として正門前の真孝公民館花壇の整備にも寮生会・部活動と共に取り組む
Check	Action
(1)文化祭・体育祭共は4年ぶりの制限無しでの有観客で実施し、これまでにない観客数で大いに盛り上がった。文化祭は露店も多く、学生の素敵な笑顔が多く見られた。体育祭では競技の見直しを行い、女子競技及び保護者も参画できる競技を取り入れ、好評であった。 (2)学生会便りをほぼ毎月発行でき、学内へPR出来た。 学生会主体のいじめ防止週間において取り組んだポスターや標語を文化祭にて展示することが出来た。 (3)正門前の真孝公民館花壇の整備を地域住民と一緒に実施した。校長先生にも参加して頂いた。今年は寮生会とのコラボも実現した。天候にも左右され、日程調整の難しさを感じた。	(1)今年の実績を活かし、学生会や実行委員会メンバーの意見を尊重し、学生が輝ける学校行事を企画・立案していきたい。 (2)学生会メンバーの自覚をより高め、自主性を尊重した運営を心掛けたい。全体での定例会に加えて、各局の打ち合わせ等も増やしていきたい。風紀局の活躍。覇者の像池の管理。 (3)真孝公民館花壇整備における地域住民との交流を図る中で、本校の学生の良さにも触れてもらいたい。そのためにも、公民館行事計画段階から情報交換を行い、さらには寮生会とも連携し取り組んでいきたい。隼人駅清掃活動の復活も検討したい。

4. 寮務主事 自己点検・評価報告

寮務主事の所管する事項	自己評価
(1) 各種感染症への対応 (2) 各種サービス・手続きの改善	A B
Plan (1) 新型コロナウイルス感染症が5類に移行したが、引き続きインフルエンザをはじめとした各種感染症の予防のための対策を行う。 (2) 学寮で提供しているサービスや手続きのDX化を進め、処理の確実性と利便性の向上を図る。	Do (1) 手洗い・うがいの励行とともに、37.5℃以上の発熱がある場合は原則帰省させる。また、離島出身者の罹患者向けに隔離部屋を1棟準備し、感染予防や感染拡大の防止に努める。 (2) あらたに寮管理システムを導入し、帰省や特別外出時にICカードを使って、寮生の出入りを管理する。また、同システムで欠食の申請受付も行う。
Check (1) 後学期の終わりに、全校的にインフルエンザが流行し、学寮でも体調不良者が急増したが、上記の対策をとっていたことにより、閉寮が必要となる事態には至らなかった。 (2) 寮管理システム「寮助」を導入したものの、使い勝手や確実性の面で不十分な点があった。そのため、従来の外泊カードや欠食届を併用する形となり、完全なペーパーレスには移行できなかった。	Action (1) インフルエンザおよび新型コロナウイルスの流行は完全には収まらない状況であるため、引き続き手洗い・うがいを中心とした学寮内での感染予防対策を実施する。 (2) 寮管理システムのアップデートを行い、各種手続きのDX化をさらに推し進める。また、寮生の意見も聞きながら独自の点呼システムの開発も検討する。

5. 研究主事・専攻科長 自己点検・評価報告

研究主事・専攻科長の所管する事項	自己評価
(1)環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町 関連取組の継続	A
(2)科研費採択率の向上	A

Plan	Do
(1) 学生が分野を横断して複数のグループを作り、ものづくりを通して課題解決を目指す。本取り組みは単年度で終わらせるのではなく、継続的に実施する。また成果については発表会を開催して意見交換を行い、問題点の改善に努め、令和6年度に繋げる。 (2) 科学研究費助成事業の応募及び採択率を向上させるために、プロジェクト・チームを設置する。 更に、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び講演会等の積極的な活用を促す。	(1) 本年度のテーマについては校内の教員から学生が取り組みやすいテーマを募集した。学生はそのテーマをもとに課題へ取り組み、8月の成果発表会にて報告した。今年度は長島町の子ども向けイベントに出展する等、教材開発に関する活動を行った。 (2) 採択率を向上させるためにプロジェクト・チームによる査読を行い、教職員に対して適切な指導・助言等の支援を行った。教員に対して第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び講演会等の受講を促した。
Check	Action
(1) 今年度新たな取り組みとして行った、半期2コマ(4単位時間)の確保、また校内の教員から多くのテーマが出されたことにより、学生が幅広いテーマで取り組むことができた。 (2) 令和5年度科研費の採択件数は9件で、前年度より4件増加した。令和6年度科研費への申請件数は63件であった。また、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニングに1名の教員が参加した。	(1) 今年度の取組方法を継続するとともに、協定自治体(日置市、霧島市、始良市)を中心に、他の自治体での課題抽出及び、近隣小中学校での教材作成を計画している。 (2) 次年度以降もチームによる査読を行い、申請書をブラッシュアップし採択率の向上を目指す。更に、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び国立高専科研費申請書査読者ネットワークによる科研費研究計画調書の査読システムの積極的な活用を促す。

6. 国際交流センター長 自己点検・評価報告

国際交流センター長の所管する事項	自己評価
(1) 海外協定校との交流プログラム(派遣、受入)の実施 (2) 高専生と国内外の大学生による国際セミナーの開催 (3) TOEIC講座及び試験の実施	S A B
Plan	Do
(1)海外協定校との交流プログラム(派遣、受入)の実施 (2)高専生と国内外の大学生による国際セミナーの開催 (3)TOEIC講座及び試験の実施	(1) NTI高校(スウェーデン)との交流プログラム(2024年1月17日～23日)を実施。6名のNTI高校生が来校。海外協定校との交流プログラム(派遣)では、スウェーデン13名、マレーシア22名、台湾15名の合計50名が参加。 (2) JSTS2023を鹿児島高専が主担当となって開催。実施期間:2023年9月4日～9月8日。 (3) TOEIC講座(オンライン)の実施とe-learning教材の活用。TOEIC Bridge®(1から3年)、TOEIC IP(4年)を実施。
Check	Action
(1) NTI高校との交流、参加者全員が満足と回答、グローバルな活動への学習意欲向上にも効果的。中学校訪問などを行い、地域メディアにも取り上げられた。 (2) JSTS2023参加人数 高専生14名(内、鹿児島高専5名)、長岡・豊橋技科大11名、海外の大学生14名であった。JSOCとして鹿児島高専生22名が参加した。JSOCの参加人数は昨年度よりも9名増加。 (3) TOEIC Bridge®およびTOEIC IP いずれもプログラム参加者の平均点は学年平均よりも高い。 例)3年生:学年平均360点、プログラム参加者 369点	(1) 海外協定校との(派遣、受入れ)の交流プログラムを今後も計画して、実施する。 (2) さくら招へいプログラムに申請する。また、グローバルキャンプを開催する。鹿児島高専の教育の特徴を活かしたハッカソンなどを実施する。 (3) TOEIC講座の実施方法(モチベーション維持の工夫)を検討する。また、放課後英会話も実施することで、ネイティブスピーカーと英語で話す場も設ける。

7. 地域共同テクノセンター長 自己点検・評価報告

地域共同テクノセンター長の所管する事項	自己評価
(1) 地域自治体・公的団体との連携 (2) 地域企業との連携 (3) STEAM教育講座の実施ならびに、状況の把握と推進	A A A
Plan (1) 自治体と連携・協力した活動を通して地域との関係を維持・強化する (2) 主にKTC企業と連携することで、地域企業との関係強化と、学生へのキャリア教育に繋げる (3) 県内小・中学生に向けたSTEAM教育講座を提供する	Do (1) 市民講座「隼人学」を10回開催(霧島市・志学館大),ロボットフェスティバル勉強会(始良伊佐地域振興局),学生へキャリア教育講義の実施(霧島/始良/日置),有識者会議等へ出席(霧島市等)など (2) 3回の技術研修会開催、学生へのキャリア教育講義や企業研究会の実施、見学会や若手人材育成事業の実施など (3) 出前型講座、来校型講座がそれぞれ実施された
Check (1) 隼人学:テーマの都合で本校講師がなかった。数年ぶりに本校を開放し、本校を身近に感じたとの感想を得た。ロボフェス:連携の話が浮上している。キャリア教育:アンケートにて地元OBの話を聞く機会として好評だった。 (2) 細かい実施により企業が本校を意識する時間は増えたと感じる。施設見学会では申込増により行先を増やした。企業研究会では一部学生の不参加があった (3) 出前型10件、来校型15件を実施。昨年の実施校からも実施依頼があり、次年度の問い合わせも既にある。年明けにwebページを設置した。	Action (1) 各自治体からの提案をもとに連携・協力していく。隼人学は講師を出し学内会場は次年度も使用する。 (2) イベント数としては増加が難しいレベルまで実施できているので、これを縮小なく維持する。担任との認識共有が学生参加のイベントでは重要であり、担任との連携に今後さらに注意を向ける (3) 講座の実施は行ったが、4月からスタートする初の年度であったため、知名度がまだ十分とはいえない。より広く周知する手立てをとるとともに、出前型講座の充実に力を入れる。

8. グローバル・アクティブラーニングセンター長 / 9. 情報セキュリティ推進責任者 自己点検・評価報告

グローバル・アクティブラーニングセンター長 / 情報セキュリティ推進責任者の所管する事項	自己評価
(1) キャンパス情報ネットワークシステム－コンテンツフィルタ	A
(2) 情報セキュリティ維持・向上への全教職員への意識啓発	A
(3) リモート会議への「ながら参加」への対策検討	A

Plan	Do
(1) コンテンツフィルタ適用除外申請フロー改善(続々) 同じサイトを毎年度申請する必要があると不便、との声に対し、「未分類」を理由としたフィルタリングが継続されないようにする。 (2) 校務連絡会定例報告内容設定(続) 情報セキュリティを他人事としないため、情報セキュリティ関係の出来事を身近に感じられるように努める。 (3) リモート会議の進行への協力 「ながら参加」している参加者が類推できような会議の進め方を実践する。	(1) 昨年度で効果が確認できたため、昨年度同様、年次の許可リストへの登録の際、配信リストの提供元へも分類申請を行う。 (2) 昨年度からの取組みを継続し、校務連絡会で本校で情報セキュリティ関係事象の対応数を報告し、注意喚起を行う。 (3) 問いかけや、「ながら参加」しているとできないタイムリーなリアクションを心がけ、リアクションすることを当たり前にする。
Check	Action
(1) 2021年度の申請件数: 約120 2022年度の申請件数: 約57(1月末までは約50だった) 2023年度の申請件数: 約43(1月末までの申請数) ※サイトは増える一方のため、同数維持でも効果有り (2) 情報セキュリティ対策についての苦情然とした連絡が少なくなってきた実感がある。自分事としている兆候に思える。 (3) 一出席者として出席する会議では、議長の方針もあり、リアクションが当たり前になってきているように思われる。	(1) 効果が確認できており、継続する。 コンテンツフィルタの運用は本部からの情報セキュリティ監査においても良好な評価が得られている。 (2) 動画視聴型の講習等における「ながら視聴」への対策を検討する。(今年度検討に至れず) (3) 取組みは継続するが、来年度はこの事項をAcrion(2)のPDCAに置き換える。

10. 学生何でも相談室長 自己点検・評価報告

学生何でも相談室長の所管する事項		自己評価
(1)いじめ対策研修の実施 (2)相談室・厚生会館の雰囲気作り (3)カウンセラーとソーシャルワーカーの充実		A A A
Plan	Do	
(1) 全学生に対するいじめ防止講演会を実施するとともに、教職員に対するいじめ対策研修を実施する。 (2) 相談室のみならず、厚生会館全体の雰囲気づくりを行う。 (3) カウンセラー、ソーシャルワーカーの積極的利用を、学内(特に担任)に向けてさらに案内する。	(1) 全学生に対する講演会を5月2日に、教職員に対するいじめ対策研修会を12月6日に実施した。 (2) 相談室前の環境整備を行った。改修された厚生会館1階の管理・運用も行った。 (3) 相談用のフォームを作成し、より予約を入れやすい体制を整えた	
Check	Action	
(1) 教職員向け研修の講師に、中園カウンセラーを起用することができた。専門家による研修は、説得力があり、効果も期待できる。 (2) 相談室前、および厚生会館1階をある程度適切に運用することができた。相談室前の光環境を、卒業研究のテーマとする学生が表れた。 (3) ほぼ隙間なく、カウンセラーとソーシャルワーカーを配置できたが、一方で教職員の配置が難しくなった。	(1) 学生向け講演会もカウンセラー・ソーシャルワーカーに依頼できるようにし、講習会・研修会の充実を図る。 (2) 厚生会館全体の雰囲気作りを継続して行う。特に1階の壁ホワイトボードの確認を頻繁に行う。 (3) カウンセラー、ソーシャルワーカーの積極的利用を、学内に向けて引き続き案内する。	

11. 特定戦略タスクフォース担当 自己点検・評価報告

特定戦略タスクフォース担当の所管する事項		自己評価
(1) 自治体と連携し、地域課題の解決と人材育成を行う		A
(2) 国内外の大学と連携し、教育・研究における協力関係の推進		A
Plan	Do	
(1) 包括連携協定を締結した長島町との相互協力を更に進めると同時に、他自治体との連携を踏まえた相互協力体制構築を進める。 (2) 長岡・豊橋技術科学大学と連携し、地域課題解決に向けた取り組みを強化する。また、ガーナ大との連携に取り組み、技術シーズの海外での展開を検討する。	(1) 長島町との受託研究を継続して地域バイオマスの利用促進に関する事業を実施した。地域課題を解決するために、2023年5月に霧島市・鹿児島市・鹿児島県農業開発総合センター・農研機構及び民間企業3社でコンソーシアムを設立した。 (2) COI NEXT事業、SHARE事業(長岡技大)などに参加した。学内に設置された豊橋技科大のサテライトオフィスに大学教員を常駐する体制を構築した。クロアポ教員として、技科大との連携を強化した。ガーナ大と覚書、秘密保持契約を締結した。	
Check	Action	
(1) 長島町主催のイベントに学生と参加し、研究成果を地域住民に示し、交流を図り、自身が取り組んでいる研究が地域社会に役立っていることを学生に気づかせることができた。学生に社会実装の場を提供し、総合知を活用した課題解決の必要性を示した。 (2) 地域バイオマスを用いた付加価値の高い食品開発に取り組み、成果を各種イベントで公開できた。機器の遠隔操作により、研究効率が高まった。ガーナ大と複数回、汚泥肥料に関して意見交換を行った。	(1) 次年度も長島町との事業を継続予定である。また、現在取り組んでいる総合知活用社会実装型事業をさらに進展させるために、教職員及び学生にフィールドを提供し、全学的に取り組む仕組みをつくる。 (2) 次年度も継続して実施する。国内外の大学と連携して教育・研究の高度化を目指す。また、国際交流センター、専攻科と連携し、研究を通じた交流を進展させる。	

12. 機械工学科長 自己点検・評価報告

機械工学科の目標		自己評価
(1) ストレート卒業率85%を目指して、学科教員担当科目の単位取得率を90%とする。 (2) 令和6年度入学試験の目標として、入試倍率1.3倍以上、女子学生の入学者4名以上とする。 (3) 論文数5本、学会発表数10件、外部資金獲得数10件とする。		B A B
Plan	Do	
(1-1) 1、2年生に対して、学生の学習方法等のアドバイス。学科教員が担当科目：単位取得率90%。 (1-2) 自発的・継続的学習の取り組み：資格取得試験およびコンテストへの参加促進。 学生のキャリアアップ：外部講師による講演会開催。 (2-1) 入試倍率の向上：広報活動の充実。 (2-2) 女子学生の入学者増：女子学生による出身中学校訪問・PR活動。女子学生のケア：女性教員を中心とした指導・相談体制構築。 (2-3) 学科PR：公開講座2つ以上。 (3) 論文数を5本、学会発表数を10件、外部資金獲得数を10件。	(1-1) チューター制、担任補助教員を配置(1、2年生)。学生の状況把握、学習アドバイス。必要に応じた補講や再評価試験等の充実。 (1-2) 各種資格試験、コンテスト、学会発表等の参加推奨。 外部講師による講話。 (2-1) ウェブページ、広報誌へ情報を掲載。 (2-2) 女子学生による出身中学校訪問(PR活動)。女性教員を中心とした女子学生の指導・相談(茶話会)。 (2-3) 公開講座の開設。 (3) 研究活動の活性化(論文投稿、学会発表、外部資金の獲得について)学科への呼びかけ。	
Check	Action	
(1) 1、2年生に対してチューター教員を配置し面談を適宜行った。生活・学習面での困りごと等の把握ができた。機械工学科教員の担当科について、受講学生の90%以上が単位を修得した科目割合は、1年生75%、2年生67%、3年生40%、4年生42%であった。 安全資格試験(システム安全アソシエイト)：3名全員合格、モビリティデザインコンテスト：44名応募、金属学会高校生ポスターセッション：4名発表。外部講師による講話：19件。 (2) 入試倍率1.5倍であり、女子の志願者は3名であった。 (3) 論文数3本(前年度0本)、学会発表7件(前年度26件)、外部資金7件(前年度14件)であった。	(1-1) 意欲的・積極的に学ぶ学習環境を構築する。魅力ある授業に努め、特に、1～3年生、留学生のケアに注力する。単位未修得の科目については、早期の単位修得を目指し、教科担当、担任および学科が連携して、学習指導を行う。授業環境を整えるために、学科全教員による机間巡視等を行う。 (1-2) 資格試験やコンテストへの参加者だけでなく、資格取得・入賞者の増を目指し、引き続き指導を行う。また、将来の夢や見通しをもたせるため、キャリアアップ講座を継続する。 (2) 入試広報や学科PR活動を活性化するために、公開講座やSTEAM教育活動を拡充する。前年度実施数+2件を目標とする。また、女子学生獲得のための中学校訪問などを行う。 (3) 研究成果を得るために、共同研究等を活性化させる(目標4件)、新しい研究テーマの立ち上げ、等を進める。	

13. 電気電子工学科長 自己点検・評価報告

電気電子工学科の目標	自己評価
(1)留年(原級留置)・退学者(1～5年)を5人程度以下/年とする (2)女子学生の入学者を増やすため、学科の女子学生3名程度の出身中学校に 教員と女子学生で学校、学科の説明に行く (3)ジャーナル誌(学会)へ論文(査読付き)を3編投稿する	B S A
Plan (現状分析) ①過去4年間の電気電子工学科の留年・退学者(転学・休学・長期欠席者等を除く,1～5年)(平均5.8人/年)(過去4年間) R4年度:4人,R3年度:4人,R2年度:10人,R1年度:5人 ②電気電子工学科の女子学生の人数(平均4.6人/学年) 1年:6人,2年:4人,3年:3人,4年:4人,5年:6人 ③電気電子工学科の昨年度のジャーナル誌への論文投稿数:0件 (計画) ①留年(原級留置)者(1～5年)を5人程度以下/年とする ②女子学生の入学者を増やすため、学科の女子学生3名程度の出身中学校に 教員と女子学生で学校、学科の説明に行く ③ジャーナル誌(学会)への論文(査読付き)投稿を3件以上とする	Do ・成績不良学生への補講・再評価・再試験実施:当該科目に対する学生の理解度向上(単位未修得率大幅低減) ・女子学生5人(5校)(鹿児島市,霧島市)がを教員と学生が訪問して、学校、学科の説明実施 ・ジャーナル誌(学会)への論文(査読付き)投稿:3件
Check 目標に対する結果: ①電気電子工学科の留年・退学者(1～5年)(転学・休学・長期欠席者を除く)(令和5年度)⇒6人(目標を概ね達成) 1年:無し,2年:1人,3年:3人,4年:2人,5年:無し ②3名程度の女子学生の出身中学への訪問(計画) ⇒5名(5校)の女子学生の出身中学への訪問(実施) (目標達成)(女子学生の合格者が6人(昨年度)⇒8人(本年度)と増加) ③ジャーナル誌(学会)への論文(査読付き)投稿:3件(目標達成)	Action (令和6年度実施予定内容) ・令和5年度目標及び結果に対する改善内容:①成績不良学生減少対策として教育効果を高める方策検討及び実施、②女子学生のみならず男子学生も含めた出身中学校への訪問による説明会実施、③ジャーナル誌への論文投稿のためのテーマ発掘及び他学科、大学との連携 ・継続して行う活動(学科教員):①チュータ制(1・2年生)、②SHR(1・2年生)(1回/週)、③成績不良学生への補講・再評価・再試験実施、④創造実習等実験の見学(低学年)、卒研発表の聴講(3年生、4年生)、⑤1・2年生の工場見学、⑥学科PRパンフレットの刷新(広報活動)

14. 電子制御工学科長 自己点検・評価報告

電子制御工学科の目標		自己評価
(1) 学校・学科のPRとして、公開講座3件以上、中学校訪問10件以上、STEAM教育を推進する。		A
(2) 科目の単位修得率向上対策を実施し、各科目において未修得者を1割以下にする。		A
(3) 学科全体で論文数2本以上と発表件数5件以上を目指す。		B
Plan	Do	
(1) 学校・学科のPRとして、公開講座3件以上、中学校訪問10件以上行う。小・中学生向け出前型STEAM教育講座の準備をし、実施する。 (2) 科目の補講、演習ややり直し試験の単位修得率向上対策を実施し、各科目において未修得者を1割以下にする。 (3) 学科全体で論文数2本以上と発表件数5件以上を目指す。	(1) 公開講座、中学校訪問、HP更新及び、AIRAふるさとチャレンジャー、STEAM教育講座を実施した。 (2) 科目の補講(クラス全員また個人)や演習および試験のやり直し試験を実施した。 (3) 研究活動の活性化を促し、論文執筆、発表を積極的に行った。	
Check	Action	
(1) 公開講座、中学校訪問、HP更新等の活動を調査し、公開講座4件、中学校訪問18件、HP更新13回行った。また、STEAM教育講座の活動について調査し、9/16にAIRAふるさとチャレンジャー、1/26に中福良小学校でSTEAM教育講座を実施した。 (2) 専門科目の未修得率を調査し、49科目／53科目中で、未修得率が1割以下となっている。 (3) 学科全体での論文数と発表件数を調査し、論文数1本、発表件数6件を行った。	(1) 中学校訪問や公開講座、イベントごとにHPの更新を行い、学校・学科のPRを行う。また、STEAM教育支援室と連携を取りながら、更に小・中学校の開拓をし実施数を増やす。 (2) 補講や演習および試験のやり直し試験、未修得の学生には、十分な教育を行った上で、再評価・再試験を実施し、各科目において未修得1割以下にする。 (3) 大学や工技センター、企業などと連携(共同研究)をし、論文執筆や発表に繋がるようにする。	

15. 情報工学科長 自己点検・評価報告

情報工学科の目標		自己評価
(1) 学科の留年者数を6人以下にする (2) 論文を学科で5本以上投稿する(国際会議は除き、フルペーパーのみで) (3) 学科の魅力を向上する: 基本情報技術者試験以上の情報処理技術者試験・情報処理安全確保支援士試験の合格者数5人以上を継続する		A B B
Plan	Do	
(1) 学業不振が直接原因の留年者数を6人以下にする。 (2) フルペーパーを学科で5本以上投稿する。 (3) 情報処理技術者試験・情報処理安全確保支援士試験の合格者数5人以上を継続する。	(1) 学科会議・成績会議等での情報交換を継続し、特に2年生担任との連携を密にするよう意識する。 (2) 論文投稿への意識高揚を継続する。 (3) 試験の紹介や受験意識の啓発に努める。	
Check	Action	
(1) 目標達成 経済的理由の場合に学生係に協力をいただいた事例があった。 (2) 4本(未達成) 人手不足のため、平時を超えて担当科目数や卒業研究の受け持ち人数が多くなってしまい、本来研究力の高い教員でも研究時間の確保が難しい状況にある。 (3) 2名(未達成) 人数は少ないが、基情よりも上位の試験に合格した学生もあり、啓発効果は得られていると考えられる。 (参考)2022年度6名	(1) 他部門との「連携」を意識し過ぎると返ってうまく連携できないことがあるため、まずは他部門に「繋ぐ」こと、すなわち「抱え込まない」ことを意識するようにする。 (2) 教員の研究時間を確保するためにも、人手不足の解消が急務であり、そのために執行部に「高専教員育成プログラム」を検討いただいた。これを活用して新任採用を目指す。 (3) 情報処理技術者試験の高度試験と情報処理安全確保支援士試験の合格者は技術士第一次試験の情報工学部門の専門科目が免除になるため、該当者には技術士第一次試験の情報工学部門の受験も勧め、対象となる試験を拡げる。授業内容で関連するものは明示し、試験対策効果も得られるようにする。	

16. 都市環境デザイン工学科長 自己点検・評価報告

都市環境デザイン工学科の目標		自己評価
(1) 学科の学生全体が関わる新たなPBLの形を模索し、今後の同様のPBLに向けたモデルケースとする。		S
(2) 各種コンテスト・資格試験の指導と支援を継続的に行い、学生が自発的に参加する環境を醸成する。		S
(3) PBL科目を利用したSTEAM教材の開発を行う。		A
Plan	Do	
(1) 授業時間外でPBL教育を組み込んだ指導により、供試体作製を行い、鹿児島コンクリートコンテスト2023で成果を競う。 (2) 以前から行っているデザインコンテスト、技術士一次試験や各種コンテストを学生に周知させ積極的に参加を促す。 (3) PBL科目を利用しSTEAM教材の開発を行い、初等教育・中等教育の生徒へ都市環境の魅力をPRする。また、学生をSTEAM教育へ参加させる。	(1) 授業時間外でPBL教育を組み込んだ指導により、供試体作製を行い、鹿児島コンクリートコンテスト2023で成果を競った。 (2) 以前から行っているデザインコンテスト、技術士一次試験や各種コンテストを学生に周知し、積極的に参加した。 (3) PBL科目を利用しSTEAM教材の開発を行い、初等教育・中等教育の生徒へ都市環境の魅力をPRした。また、学生をSTEAM教育へ参加させた。	
Check	Action	
(1) 昨年度より2チーム多い9チーム(2年生から5年生の計30名参加、特に今年度は他学科から2名参加)が参加し、ドラコン部門、ニアピン部門(高専・大学・大学院部門)の両方で優勝、準優勝、3位を獲得した。 (2) デザコン(構造デザイン部門)で54校中7位を獲得した。インフラテクコン2023に3Cグループが参加しグランプリを受賞した。技術士一次試験を3年生から専攻科生が受験し、2桁の学生が合格した。 (3) 長島町教育委員会が主催する科学教室と久留米高専での公開講座に教員2名と学生4名が参加し、小中学生へ都市環境の魅力をPRした。	(1) 令和6年度も令和4年度から実施している授業時間以外での学年縦断PBL教育を継続し、教員の負担を軽減できる学生主体の教育環境作りを目指す。 (2) 各種コンテスト・資格試験の指導と支援を継続し、新たなコンテスト・資格試験へチャレンジする支援体制(例えば、合格した学生からの指導など)の構築を目指す。 (3) 令和6年度も継続してPBL科目を利用してSTEAM教材を開発する。開発した教材を本校のSTEAM教育支援室と連携し、初等・中等教育の生徒さんへSTEAM教育を実施する。	

17. 一般教育科長 自己点検・評価報告

一般教育科の目標	自己評価
一般教育科は、学生の生涯にわたって学び続けよりよく生きようとする力と、技術で世界を幸福にするための力を育てる。この理念を達成するための具体的な目標を、以下の“Plan”に示す	(1) A (2) A (3) B
Plan (1) 1年生混合学級の導入から2年目になり、昨年度よりもスムーズなクラス運営を行う。 (2) 新規科目のリベラルアーツⅠを軌道に乗せる。 (3) 成績評価の多様性の観点から、現在の学生に合った成績評価方法を検討する。単位未修得の割合をおおむね10%未満にする。	Do (1) 定期的に1年担任の会議を行い情報共有を行う。また担任同士で協力して学生指導に当たる。 (2) 担当者同士の連携を密にして、専門学科の教員と一般科目の教員相互の協力を行う。 (3) その科目に合った方法で、教育および成績評価を行い、単位取得率を向上させる。
Check (1) 1年担任団としての情報共有や連携の他、個別の案件では、担任同士での相談・連携も行い、昨年度に比べ、スムーズなクラス運営ができている。 (2) 残念ながら、1名の単位未修得者を出してしまったが、おおむね全てのテーマで当初の予定どおりの活動ができ、文化祭でも、その成果を発表できた。 (3) 低学年においては、ほとんどの科目で単位未修得が目標の10%未満を達成し、さらには、5%以下にまで下がっている科目も増えている。しかし、一方で、学生が苦手としている数学(特に上の学年で)などは、まだ目標に達していない科目もある。	Action (1) 1年の学年主任を中心に、担任団だけでなく教科担当者との連携を深め、学習面だけでなく、1年生の学校生活においても、適切な指導を行う。 (2) R6年度は2年目に当たるため、担当者だけでなく学科内でも当該科目に関する理解を深め、各教員が積極的に関わられるようにしていく。 (3) これまで以上に、単位未修得者を出さないよう、特に数学については学校全体の課題として取り組む。また、どの教科についても未修得の学生には、事前に十分な指導を行った上で、再評価・再試験を積極的に実施する。

18. 総務課長 自己点検・評価報告

総務課長の所管する事項	自己評価
(1) 鹿児島高専創立60周年記念事業	A
(2) 人事に関する計画(事務職員・技術職員SD)	A
(3) 施設及び設備に関する計画	A

Plan	Do
(1) 鹿児島高専創立60周年記念事業について、総務企画主事等関係各位と連携して企画する。 (2) 事務職員・技術職員SDを実施し、業務改善型研修として電子決裁WGを企画する。 (3) 厚生会館一階の内部改修、機械工学科棟空調改修等の工事及び高専スタートアップ教育環境整備事業を計画する。	(1) 関係各位と連携して記念式典、記念講演、パネルトーク、新校章の制定、記念誌の発行等を実施した。 (2) これまでの学内外研修・スキル向上支援・フォローアップ支援プログラムに加え、業務改善型研修として電子決裁WGを実施した。 (3) 厚生会館一階の内部改修、機械工学科棟空調改修等の工事及び高専スタートアップ教育環境整備事業を実施した。
Check	Action
(1) 同窓会・後援会・KTC等関係各位と連携して、記念式典を無事実施することができた。高橋忠仁氏による記念講演、ダイバーシティに関する学生を交えたパネルトークも盛会であった。新校章を制定し校旗や徽章を更新できた。編纂委員会により六十年誌が発行された。 (2) 計画的にWGを実施し、関係規則を改正し、立替払申請等の電子決裁を実施または試行し、1月の事務部主催の教職員集会において報告を行った。 (3) 高橋基金、営繕要求、補正予算によるこれらの事業の実施により、本校の教育研究環境を改善できた。	(1) 創立60周年の歴史を踏まえ、学科改組等、次の課題へ向けて対応していく。 (2) 立替払申請等の電子決裁を実施するとともに、電子決裁の範囲を拡大し、さらなる業務の効率化を図っていく。またデジタル化で得られたデータを活用しDXを推進する。 (3) 今後も本校の教育研究環境を改善するため、適切な予算要求や契約、安全着実な工事等を実施していく。

19. 学生課長 自己点検・評価報告

学生課長の所管する事項		自己評価
(1) 入試業務の円滑な実施 (2) 学校諸行事におけるコロナ禍後の状況に応じた開催 (3) 学生課関連諸規程の適切な見直し		A A A
Plan	Do	
(1) WEB出願及び最寄り地等受験制度の周知、関係高専間連携による受験生・保護者の利便性向上、及びコロナ禍後の実施体制等により 円滑に入試を実施 する。 (2) 保護者懇談会や学校説明会、一日体験入学、高専祭等の 学校諸行事において、コロナ禍後の状況に応じた開催内容により適切に開催 する。 (3) 学生課関連の諸規程に関する本校の手続きや機構本部の意向等に沿って、意見要望や改正趣旨を踏まえた 規程の適切な見直し を行う。	(1) 募集要項掲載や学校説明会による周知を図り、高専間では実施方法等を 相互確認 。コロナ禍後の状況に応じた 実施体制及び実施要項等の見直し を行った。 (2) 関係委員会や教職員間での開催内容や受付・誘導体制等に関する検討や学生会との連携 を行い、参加申込やアンケートでのForms活用等で効率化を図った。 (3) 学年進行に伴う教育課程表の変更等に係る学則の一部改正をはじめとして、担当係での 現状把握や手続き等の確認を徹底し、関係委員会にて検討した 。	
Check	Action	
(1) WEB出願受付業務や最寄り地等受験(本校志願1名、他校志願11名)で混乱や支障を生じることなく、その定着化にも寄与できた。見直した実施体制及び実施要項等により 入試を円滑に実施した 。 (2) 開催にあたり準備不足や当日はイレギュラーなことも起こりつつ、適宜、臨機応変に対応し、 概ね予定通り大きなトラブル無く各行事を開催できた 。 (3) 諸規程それぞれの関係委員会での検討を経て、適宜、運営委員会にて協議し、 学則の外、規則や取扱規程、学生準則や申し合わせについて審議了承された 。	(1) 入試委員会を中心に、関係教職員からの意見や要望、提案に基づくとともに受験生目線に立った 実施要項の見直し等 を行い、さらなる 受験生・保護者の利便性向上を図りつつ、より適切な入試運営を目指す 。 (2) 実行委員会等で、関係教職員・学生会からの意見や要望、提案に基づくとともに寄せられたアンケートを参考に 改善を図りつつ、より適切な行事開催を目指す 。 (3) 諸規程の見直しや整備を行う過程で、実際の運用とは異なる箇所や文言の不統一等が見受けられたことから、 随時巡回的に諸規程の精査と見直しを図る 。	

20. 技術長 自己点検・評価報告

技術長の所管する事項		自己評価
(1) 学生の安全教育に関すること。 (2) 学内の安全衛生の管理に関すること。 (3) 職員の資質向上に関すること。		A A A
Plan	Do	
(1) 実験実習以外の活動等で実習工場を使用する学生向けの安全教育として、実習工場安全講習会を実施する。 (2) 有資格者による労働安全衛生法で必要な機器等の点検や巡視等を実施し、学内の安全衛生の管理を行う。 (3) 職員の学内外研修等の積極的な参加、科学研究費(奨励研究)の全員申請を目指す。	(1) 実験実習以外で実習工場を使用する場合の学生向けの安全教育として、実習工場安全講習会を4回実施した。(4月11日、4月21日、5月18日、10月2日) (2) 労働安全衛生法で定められた局所排気装置等の点検業務や選任された衛生管理者による学内の巡視等による安全衛生の管理を行った。 (3) 学内において事務職員と連携した業務改善型研修として事務用電子決済システムの開発、学外の技術職員研修会等への積極的な参加、科学研究費(奨励研究)への組織的な取り組みにより全員申請を行った。	
Check	Action	
(1) 実習工場安全講習会を4回実施して希望学生全員(139名)が受講した。 (2) 有資格者による局所排気装置等の法令点検を実施した。また、選任された衛生管理者による学内の安全衛生に関する巡視内容等を安全衛生委員会で報告した。 (3) 学内外の研修会への参加が積極的に行われている。令和5年度の科研費(奨励研究)の採択件数(4件)は全国高専で第2位の採択件数であった。	(1) 希望学生全員が受講できるように複数の日程を調整して実習工場安全講習会を行う。 (2) 有資格者による労働安全衛生法で必要な機器等の点検や巡視等を実施し、学内の安全衛生の管理を行う。 (3) 令和6年度も職員の資質向上のために学内外研修等への積極的な参加、科研費(奨励研究)の計画的な準備を行い全員申請を目指す。	

21. 校長による自己点検・評価総括

校長による自己点検評価総括

PDCAサイクルによる自己点検・評価のシステムが定着し、いずれの部署も4つの項目とも概ねしっかりした記述がなされている。一方で下記項目が不足していると考えており、次年度の計画・実行に反映していただきたい。

1. Actionについての記述が、「Plan」に書かれた内容(〇〇とすると)を「R6年度も継続して〇〇する」「これまで以上に〇〇する」というように、Planの焼き直し(あるいはほぼ同じ)にしか過ぎない部署が散見される。「Planを“どのように修正”し取り組むのか?」「P→D→Cを経た上で考えついた“次の”戦略」のように、“新たな”Action方針を示していただきたい。常々伝えている通り、単なる継続ではその事業(計画)は右肩下がりにしかならない。
2. 学校として取り組むべき大きな目標として「Well-being志向教育の推進」があるが、各部署のPDCAには教務主事管轄以外ではこのワードが出てきていない。各部署が、本校におけるWell-being志向教育にどのようにコミットするかを明確にPlanに含め、実行していく必要がある。
3. 継続的な課題となっている「原級留置への対策(単位未修得生の対応)」「研究活動の活性化」に対しては、Checkでの分析が若干甘い(記述可能な分量が少ないこともあるが)と考える。学校としてのフレームワークと個々の取り組みのどこに問題があるのかの分析のもとにアクションプランを計画していただきたい。

Ⅱ. ミッションに基づいた 自己点検・評価報告

目次

(i) 本校のミッションと自己評価基準	32
(ii) 令和4年度のミッションに基づいた評価項目に対する自己点検・評価結果	33
1. 本校のミッションに関する取り組み	33
1.1 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること	33
1.1.1 教育の質の保証	33
(a) 学位授与方針について	33
・カリキュラムポリシーの見直し（本科）	33
・社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し（定期的見直し）	33
(b) 本科の教育について	33
・成績保管状況の把握	33
・成績評価の妥当性の把握	34
・試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握	34
・学修単位の学修時間の把握	34
(c) 専攻科の教育について	35
・試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握	35
・学修単位の学修時間の把握	35
1.1.2 教育の成果	35
(a) 本科の教育の成果について	35
・留年率、退学率の改善の方策（全国の平均を目安とする）	35
・入試倍率の把握（確保）	36
・本科生の学外研究発表の推進、状況の把握	36
1.1.3 グローバル教育（国際交流）	36
(a) 英語力向上の取り組みについて	36
・提携校との連携	36
・提携校との連携プログラムに参加した学生の TOEIC 等の点数の把握	37
(b) 海外インターンシップについて	37
・提携校との連携プログラムに参加した学生の TOEIC 等の点数の把握	37
1.1.4 学生支援	38
(a) 学生支援体制について①	38
・教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、 学習環境（含 ICT）の把握、留学生支援に対する把握、障害者支援に対する把握	38
(b) 学生支援体制について②	38
・キャリア支援プログラムの計画・実施、進路指導の全学的取組推進	38
・キャリア支援、進路指導状況の把握・ガイドライン等の策定	39
(c) 学生支援体制について③	39
・いじめ対策研修の実施	39
(d) 学生支援体制について④	39
・特色ある取り組みの推進と状況把握（各種コンテスト参加推進：SSD）	39
(e) 在校生学生アンケートについて	40

・ 在校生（４年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）	40
(f) 卒業生（５年生）学生アンケートについて	40
・ 卒業生（５年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）	40
1.2 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと	41
1.2.1 教育の成果	41
(a) 専攻科の教育の成果について	41
・ 環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町関連取組の継続	41
・ 定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握	41
・ 専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握	41
1.2.2 研究	42
(a) 教員の研究業績について	42
・ 第５ブロックの共通目標達成のための取組	42
・ 特例適用教員数の向上	42
(b) 科研費と外部資金について	43
・ 科研費採択率向上	43
1.2.3 社会連携（企業との連携）	43
(a) 企業との連携について①	43
・ NEC との連携状況の把握	43
1.3 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること	44
1.3.1 社会連携	44
(a) 自治体等との連携について	44
・ 教育における自治体との連携	44
・ 技術士会との共同教育	44
・ 霧島市、日置市、姶良市との連携	44
・ 委員等による自治体との連携	45
・ キャリア教育における自治体との連携	45
(b) 鹿児島高専テクノクラブ（KTC）について	46
・ KTC 企業見学状況等の KTC によるキャリア教育の実施状況、成果の把握	46
・ 共同研究実施状況の把握	46
・ KTC 事業実施状況の把握	46
(c) 企業との連携について②	47
・ 京セラ株式会社との連携	47
1.3.2 学生支援	47
(a) 学生支援体制について⑤	47
・ 地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、錦江スポーツクラブ、Robogals）	47
2 ミッション以外の取り組み	49
(a) 魅力ある鹿児島高専への取り組み	49

・ 鹿児島高専魅力向上プロジェクトチームの設置	49
・ 1 年生への混合クラス、創作活動、工学基礎実習の導入状況の把握	49
(b) 各学科の PDCA 実施	49
・ 各学科の PDCA 実施状況の把握	49
3. 管理運営	51
3.1 管理運営	51
(a) 教育組織について	51
・ 女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握	51
・ 女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握	51
(b) FD 研修、表彰、SD 等について	51
・ 教員相互の授業参観の改善	51
・ 教育力の質の向上のための研修等	52
・ 遠隔授業の質の向上のための研修等	52
・ 学生による授業アンケートの把握	52
・ FD フォーラム・FD レクチャーシリーズの開催	53
・ 新任教職員研修（SD 関連）	53
・ ハラスメント防止（SD 関連）	53
(c) 自己点検・評価	54
・ 各規定の制定	54
・ PDCA に基づいた評価の必要性（PDCA サイクルの再構築）	54
・ 企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について	54
4. 各外部評価の指摘事項の改善点	55
4.1 指摘事項	55
(a) 本校としての中期目標、長期目標を設定し、その目標に対する重点項目を明確にした 本校独自の自己点検・評価の実施	55
(b) 外部評価委員の事前質問の情報共有	55
（資料 1）鹿児島高専における課題対応図	56

(i) 本校のミッションと自己評価基準

～ 本校のミッション ～

1. 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること
2. 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと
3. 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

<自己評価基準>

達成度と自己評価	評価基準
S：計画以上に進行している	「目標以上の成果が得られている」、または「目標以上の成果が得られる形で進んでいる」
A：計画通りに進行している	「目標通り 100%の成果が得られている（ほぼ目標通りの成果が得られている形を含む）」、または「目標通り 100%の成果が得られる形で進んでいる」
B：計画からやや遅れている	「目標には届かなかったが、概ね 70%以上の成果が得られている」、または「目標には届かないが、概ね 70%以上の成果が得られる形で進んでいる」
C：計画から遅れている	「目標の 50%以上 70%未満の成果にとどまっている」、または「目標の 50%以上 70%未満の成果となる形で進んでいる」
D：計画から大幅に遅れている	「目標の 50%未満の成果にとどまっている」、または「目標の 50%未満の成果となる形で進んでいる」

(ii) 令和5年度のミッションに基づいた評価項目に対する自己点検・評価結果

1. 本校のミッションに関する取り組み

1.1 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること

1.1.1 教育の質の保証

(a) 学位授与方針について

番号	項目	内容
1	取組事項	カリキュラムポリシーの見直し（本科）
	P【計画】	令和3年度にCPを見直したことに係る学生への影響を確認しながら改善を検討する。
	D【行った活動】	授業アンケートの結果などを踏まえて改善を検討した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	まだCP見直しの影響について確認が必要であると考えられるため、今後も継続して学生に与える影響を注視しつつ、必要に応じて更なるCP見直しを検討する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も更に半導体や起業の要素をどのように取り込んでいくかを含めて検討していく。
2	取組事項	社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し（定期的見直し）
	P【計画】	本科は令和2年度にDPを、令和3年度にCPを見直したので、今後はAPを見直す予定であるが、DP、CP見直しに係る学生への影響を確認しながら作成を行う。 専攻科は令和4年度に九州大学との連携教育に係る3ポリシーの追記を行ったので、この影響も確認しながら必要に応じて見直しを行う。ただし、令和8年度に改組を控えているため、この点も考慮に入れる必要がある。
	D【行った活動】	授業アンケートの結果などを踏まえて、本科、専攻科ともに現3ポリシーの学生に与える影響を確認しながら見直しを検討した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	本科は高専機構における基本方針の見直しと変更、専攻科は大学改革支援・学位授与機構（機関別認証評価）の審査における指摘事項を受けて、本校の3ポリシーを変更すべきかどうかを検討、判断している。令和8年度の改組も含めて検討し、今年度の見直しは行わないこととなった。ただし、今後も3ポリシーの学生に与える影響を注視の上、必要に応じて見直しを検討する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	3ポリシーの見直しは、今後も必要に応じて行う。

(b) 本科の教育について

番号	項目	内容
1	取組事項	成績保管状況の把握
	P【計画】	成績保管資料について、教員は試験実施後2か月以内に指定フォルダへ保管するよう依頼する。令和4年度分の成績保管資料

		を令和5年度にチェックする。
	D【行った活動】	令和4年度分を令和5年5月にチェックを行い、令和5年6月に教務委員会で結果を確認した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和4年度成績保管資料をチェックした結果、全て問題ないことが確認された。 令和5年度成績保管資料についても、適切に保管する体制が取られている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
2	取組事項	成績評価の妥当性の把握
	P【計画】	成績評価の妥当性について、シラバスの評価方法に基づき評価されているかどうか教務委員会で確認する。
	D【行った活動】	教務委員会で令和4年度の確認対象科目を決定し、令和5年5月に各科の教務委員が確認を行った。確認結果については、令和5年6月の教務委員会で報告し情報を共有した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	特に大きな問題点は確認されなかった。また、科目担当者へ確認（ヒアリング）した結果、特に大きな問題は確認されなかった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
3	取組事項	試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握
	P【計画】	試験実施科目については、試験問題セルフチェックシートを提出させる。令和6年3月の教務委員会で1年分のセルフチェックシートを確認し、試験問題のレベルや難易度について確認する。
	D【行った活動】	中間試験及び定期試験後に試験問題セルフチェックシートをMicrosoft365のformsを使用して実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	試験が適正に実施されたことを教務委員会として把握できている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
4	取組事項	学修単位の学修時間の把握
	P【計画】	学修単位の学修時間の把握について、教務委員会等で議論を重ね、対応方針等について検討していく。
	D【行った活動】	教務委員会、教務主事・主事補会議で、学修単位の学修時間の把握等について検討を重ねた。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	学修時間の把握については、事前周知の方法で実施する予定であるが、具体的な実施方法について継続して検討中である。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	引き続き、教務委員会の検討課題とし、教務委員会で検討を重ねていく。

(c) 専攻科の教育について

番号	項目	内容
1	取組事項	試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握
	P【計画】	試験実施科目については、試験問題セルフチェックシートを提出させる。令和6年3月の専攻科委員会で1年分のセルフチェックシートを確認し、試験問題のレベルや難易度について確認する。
	D【行った活動】	定期試験後に試験問題セルフチェックシートの提出をMicrosoft365のformsを使用して実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	アンケートは適正に実施され、結果を専攻科委員会として把握できている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
2	取組事項	学修単位の学修時間の把握
	P【計画】	講義第1週目に自学自習チェックシートを配布し、定期試験終了後に回収、確認する。また、試験では、講義で教授した内容に加え、自学自習が必要な発展的な設問を設け、学修時間のエビデンスとする。
	D【行った活動】	令和3年度から、自学自習チェックシートを導入し、学修時間が不足している学生に対し、科目担当教員から指導を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	各教員が学生の自学自習の内容及び時間等を把握することができ、学生への指導へ活用させることができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も、科目担当者がチェックシートを活用し、学生への指導へ活用していく。すべての科目において、チェックシートが提出されたことを確認する。

1.1.2 教育の成果

(a) 本科の教育の成果について

番号	項目	内容
1	取組事項	留年率、退学率の改善の方策（全国の平均を目安とする）
	P【計画】	前期終了科目で「不可」の科目については、全学的に早期の対応（再評価）を依頼する。再試験についても早い時期での実施を求める。
	D【行った活動】	前期終了科目で「不可」の科目について、全学的に早期（令和5年11月まで）の対応（再評価）を依頼した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	比較的、再評価に積極的に対応する教員が増えてきている。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	留年対策に係る学生支援の在り方について、今後、入学する学生の質の低下を考慮し、教員が自ら授業力・対応力・人間力等を向上させることが、今後の課題と考えられる。

2	取組事項	入試倍率の把握（確保）
	P【計画】	入試広報プロジェクト・チームを中心に入試広報活動を行っていく。 また、入試広報活動の一環としてバーチャルオープンキャンパスを更に充実させる。
	D【行った活動】	鹿児島県内の中学校（69校）へ入試広報プロジェクト・チーム（PT）を派遣し、入試広報に係るPR活動を行うことができた。 また、コロナの影響で令和2年度から中止していた一日体験入学を今年度は開催し、過去最多の526名の申し込みがあった。 台風や感染症の影響で欠席者が多く、結果として487名の参加となったが、多くの方に本校のPRを行うことができた。 更 さらに、コロナ禍でオンライン開催していた学校説明会を対面とオンライン併用で開催し、近隣・遠方両方の参加者に好評を得た。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	アフターコロナを意識して入試広報活動のWeb化を推進しながら取り組むことができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和 65 年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。 また、女子学生の確保に力をいれていく。
3	取組事項	本科生の学外研究発表の推進、状況の把握
	P【計画】	令和5年度末に、本科生の学外発表の状況を各学科の教務委員が把握し、教務委員会に報告する。
	D【行った活動】	令和6年3月に各学科の教務委員は、学外発表の状況を把握し、教務係へ報告する予定。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和6年3月に把握するため、まだ成果は得られていない。
	自己評価	B：計画からやや遅れている A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度も同様に学外発表の推進、状況の把握を行う。

1.1.3 グローバル教育（国際交流）

(a) 英語力向上の取り組みについて

番号	項目	内容
1	取組事項	提携校との連携
	P【計画】	1) 海外協定校との交流プログラム（派遣、受入）の実施 2) 高専生と国内外の大学生による国際セミナーの開催
	D【行った活動】	1) 令和6年1月17日～23日にNTI高校との交流プログラムを実施した。授業・実習への参加、中学校訪問、放課後を利用して学生間の交流を行った。学生運営委員会（JSOC）により、運営を行った。 海外協定校との交流プログラムでは、スウェーデン・ストックホルム夏季異文化研修の参加者が13名、マレーシア・

		MJIT との春季語学・異文化研修の参加者が 22 名、春季台湾研修・台北科学大学との交流プログラム参加者が 15 名であった。 2) JSTS2023 を鹿児島高専が主担当となって開催した。実施期間は、令和 5 年 9 月 4 日～9 月 8 日。学生運営委員 (JSOC) を組織した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	1) 海外協定校との交流プログラム（派遣）では年度内で過去 5 年間では、最多の派遣人数 50 名を達成した。 2) JSTS の参加人数は、高専生 14 名（内、鹿児島高専 5 名）、長岡・豊橋技科大 11 名、海外の大学生 14 名であった。JSOC として鹿児島高専生 22 名が参加した。
	自己評価	S：計画以上に進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	1) 海外協定校との交流プログラムでは来年度はグローバルキャンプを実施予定。
2	取組事項	提携校との連携プログラムに参加した学生の TOEIC 等の点数の把握
	P【計画】	1) 1～3 年生全員を対象に TOEIC Bridge®を実施する。 2) 4 年生全員対象に TOEIC IP テストを実施する。
	D【行った活動】	外部講師による TOEIC 講座（オンライン形式）を実施した。 1～3 年生全員を対象に TOEIC Bridge®を実施した。 4 年生全員対象に TOEIC IP テストを実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	TOEIC Bridge®試験の結果【学年平均、プログラム参加者平均】として、1 年生【302 点、305 点】、2 年生【311 点、342 点】、3 年生【360 点、369 点】であった。 TOEIC IP の試験の結果は、4 年生の学年平均とプログラム参加者平均は【321 点、359 点】であった。いずれの学年も、平均点はプログラム参加者の方が高得点である。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	オンライン形式の TOEIC 講座は参加者を増やすこととモチベーション維持が重要であり、実施方法等を検討する。

(b) 海外インターンシップについて

番号	項目	内容
1	取組事項	提携校との連携プログラムに参加した学生の TOEIC 等の点数の把握
	P【計画】	海外インターンシップの実施を検討する。
	D【行った活動】	タイの MK WATERTech CO., LTD. とインターンシップの計画をして、募集を行った。（研修期間 令和 5 年 8 月 30 日～9 月 20 日）
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	海外インターンシップの実施について広く周知したが、参加希望者がいなかった。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和 6 年度の海外インターンシップ（企業、大学）の実施に向けて準備を行う。

1.1.4 学生支援

(a) 学生支援体制について①

番号	項目	内容
1	取組事項	教育、生活環境の状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、学習環境（含 ICT）の把握、留学生支援に対する状況把握、障害者支援に対する状況把握
	P【計画】	昨年度実施した満足度調査アンケートでの回答を参考に改善可能な点について検討するとともに、設問項目を検討した上で、今年度も満足度調査アンケートを実施する。
	D【行った活動】	昨年度のアンケートの回答を基に、冷水器の設置や教室の配置変更等の改善を行うとともに、令和6年2月に全学生向けに満足度調査アンケートを実施予定である。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握することができ、得られた意見を基に改善できた事項もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今年度の意見を基に、満足度の低かった事項、意見について把握し、来年度改善すべき事項を関係各所でも共有する予定である。

(b) 学生支援体制について②

番号	項目	内容
1	取組事項	キャリア支援プログラムの計画・実施、進路指導の全学的取組推進
	P【計画】	キャリア支援室を中心に、学内のキャリア支援プログラムについて把握・整理し、キャリア支援プログラムの充実化を図る。また、本校のキャリア支援の在り方を検討する。
	D【行った活動】	各部署・各学科で計画しているキャリア支援プログラムと実績を取り纏め、学内に周知した。また、キャリア支援室として、先輩講話、インターンシップ報告会、学内合同企業セミナー、低学年向けのキャリア講話、企業見学会、全学年が参加できるKTC インターンなどを企画し、実施した。 昨年度に引き続き、求人面談の対応手順について整理し、学生係、各科担任と共有した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	学内のキャリア支援の計画を把握し、新たなキャリア支援プログラムを複数回計画・実施することで、当初の想定以上にキャリア支援が充実化できた。学生等からの評価も非常に良いものであった。また、求人面談の対応手順も整理し、関係者とスムーズな情報共有ができています。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	これまで行ってきたキャリア支援プログラムの実施状況を把握・整理し、入学時から卒業・卒業後までのキャリア支援の在り方を検討する。そして、新たなキャリア支援プログラムを計画・立案、キャリア支援プログラムの年間計画を作成し、学生へ周知していく。

	取組事項	キャリア支援、進路指導状況の把握・ガイドライン等の策定
	P【計画】	キャリア支援、進路指導状況を把握し、必要に応じて、就職・進学指導ガイドラインの見直しを行い、学生、関係者に周知する。また、求人情報については、求人管理システムを導入し、全学科横断のシステムの運用を開始する。
	D【行った活動】	就職・進学指導ガイドラインの見直しを行い、学生、関係者へ周知した。 令和5年度から卒業生・修了生を対象とした就職情報、進学情報等の情報提供に高専キャリアサポートシステムの利用を開始しており、全学科で共通した就職進学のサポートを行った。
2	C【得られた成果及び自己評価の理由】	就職・進学指導ガイドラインの見直し、計画通りに実施でき、学生へも周知できた。 高専キャリアサポートシステムについては、計画通り、順調に運用できており、全学年の学生が利用できるシステムを確立した。また、令和6年3月に実施される高専生のための合同会社説明会では、校内での周知を強化した結果、参加人数が前年度比で2倍以上増加し、多くの学生がキャリア形成を考えるきっかけ作りができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	必要に応じて、就職・進学指導ガイドラインの見直しを行い、学生、学内へ周知していく。 高専キャリアサポートシステムを活用したインターンシップの情報提要についても運用の拡充が可能か検討を行う。

(c) 学生支援体制について③

番号	項目	内容
	取組事項	いじめ対策研修の実施
	P【計画】	全学生に対するいじめ対策研修を令和5年4月に実施するとともに、教職員に対する研修を実施する。
1	D【行った活動】	令和5年5月2日に全学生を対象に学生何でも相談室長から講演を行い、令和5年12月6日に教職員向けの講演会を中園スクールカウンセラーが行った。今年度の新たな取り組みとして、学生会において高専祭でいじめ防止の標語の作成・掲示を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	昨年度と同様、本校のいじめ防止等基本計画を中心とした講演となっており、いじめの定義等学生にとって理解を促す良い機会となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度についても、継続して学生向けの講演会、教職員向けの研修会を実施予定である。

(d) 学生支援体制について④

番号	項目	内容
1	取組事項	特色ある取り組みの推進と状況把握（各種コンテスト参加推進：SSD）

	P【計画】	鹿児島高専 Supporting Students Dreams (SSD) 事業を学生委員会で実施するため、申請要件等を定めるとともに、募集、採択、実施効果の検証等を実施する。
	D【行った活動】	令和5年4月と10月に申請案内を行い、審議の結果昨年度からの継続も含め10件の活動を採択した。 採択した活動については、参加学生にアンケートを実施し、今後活動報告を提出してもらうことを予定している。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	募集から、活動選定まで当初の予定通りに遂行できた。 SSD 事業によるコンテスト等での入賞実績等もあり、参加学生アンケートでも非常に評価及び満足度が高いことが示された。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度についても、継続して募集等を行う予定であり、採択件数が増え、活動が活発化することにより、活力ある学校を推進できると考えている。

(e) 在校生学生アンケートについて

番号	項目	内容
	取組事項	在校生（4年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）
1	P【計画】	昨年度実施した満足度調査アンケートでの回答を参考に改善可能な点及び設問項目について検討するとともに、今年度も満足度調査アンケートにて学生のニーズについて調査を実施する。
	D【行った活動】	令和4年度のアンケート回答で記載のあったニーズを基に、教室配置の変更、冷水器の設置等を行うとともに、令和6年2月14日に全学生向けに満足度調査アンケートを実施し、回答を取集中である。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	学生のニーズを学校として把握することができ、得られた意見を基に改善できた事項もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今年度のアンケートで回答のあった学生のニーズを把握し、来年度改善すべき事項を学生委員会でも共有する予定である。

(f) 卒業生（5年生）学生アンケートについて

番号	項目	内容
	取組事項	卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業業改善要望）
1	P【計画】	卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業業改善要望）結果を分析し、今後の学校運営に繋げていく。
	D【行った活動】	今回の卒業生アンケートについても、高専機構からの質問に本校の質問を追加させて令和6年2月末までに実施する。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和4年度の結果を教務委員会で報告し、各学科に結果を共有した。令和5年度のアンケート結果は令和6年度に分析し、教務委員会で報告する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も引き続き、アンケート結果について教務委員会にて検討していく。

1.2 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと

1.2.1 教育の成果

(a) 専攻科の教育の成果について

番号	項目	内容
1	取組事項	環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町関連取組の継続
	P【計画】	学生が分野を横断して複数のグループを作り、ものづくりを通して課題解決を目指す。 本取り組みは単年度で終わらせるのではなく、継続的に実施する。また成果については発表会を開催して意見交換を行い、問題点の改善に努め、令和6年度に繋げる。
	D【行った活動】	例年は通年で1コマ（2単位時間）の授業であったが、本年度は前期2コマ（4単位時間）連続で実施し、テーマについては校内の教員から学生が取り組みやすいテーマを募集した。学生はそのテーマをもとに課題へ取り組み、令和5年8月の成果発表会にて報告した。 今年度は長島町での課題解決に関する取り組みは行わなかったが、長島町の子ども向けイベントに出展する等、教材開発に関する活動を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	今年度新たな取り組みとして行った、半期2コマ（4単位時間）の確保、また校内の教員から多くのテーマが出されたことにより、学生が幅広いテーマで取り組むことができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今年度の取組方法を継続するとともに、協定自治体（日置市、霧島市、姶良市）を中心に、他の自治体での課題抽出及び近隣小中学校での教材作成を計画している。
2	取組事項	定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握
	P【計画】	令和5年度も同様に定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等を把握する。必要に応じて分析を行っていく。
	D【行った活動】	各種データを整理、分析して、専攻科委員会で状況を報告している。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	専攻科委員会で各種データを整理し、常に把握している。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度も同様に定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等を把握する。必要に応じて分析も行っていく。
3	取組事項	専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握
	P【計画】	教員へ外部資金の獲得を促すと共に、学生の学外発表を推奨する。
	D【行った活動】	学生の学外研究発表数等の把握を専攻科毎に行うこととし、令

		和6年3月の専攻科委員会で報告する。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	修了予定学生全員が、学外研究発表を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員へ外部資金の獲得を促すと共に、学生の学外発表を推奨する。

1.2.2 研究

(a) 教員の研究業績について

番号	項目	内容
1	取組事項	第5ブロックの共通目標達成のための取組
	P【計画】	第5ブロックの共通目標について、学内で共通理解を深めていく。 共通目標：①専門系：査読付き論文少なくとも2編 一般系：論文2編以上 and/or 著書1冊以上 *中堅・若手の教員は第一著者として論文執筆することが肝要である。 ②外部資金：過去3年分の実績額（平均）の110%及び科研費採択率前年度比3%増
	D【行った活動】	第5ブロックの共通目標について、学内で周知を行い、高専機構等の研究力アップに関するイベントについては、積極的な参加を呼びかけた。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和4年度の論文数は23件（延べ数）であった。科研費採択率は令和4年度8%、令和5年度13%となっており、前年度比5%増であった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	第5ブロックの共通目標達成者数をチェックし、目標未達成者については、今後3年間の研究計画書（論文投稿計画書）の提出を求める。また、高専機構主催の研究力強化プログラムへの積極的な参加を継続して呼びかける。
2	取組事項	特例適用教員数の向上
	P【計画】	申請時にヒアリングを行い、書類の記入方法（業績の見せ方など）について指導する。 また、筆頭著者、責任著者としての論文執筆を増やすよう指導を行う。
	D【行った活動】	申請した3名は変更申請だったため、今年度の研究主事及び研究主事補ヒアリングの実施はなかった。 機構主催の研究力強化プログラム参加者に対し、研究主事等がメンターとなり、論文執筆の手助けを行った。 令和5年度入学生から、九州大学との連携教育プログラムにおける連携教員としての参加を積極的に呼びかけた。連携教員となることで、指導実績、研究実績の積み増しが見込まれる。 令和7年度以降の受審となった「教育の実施状況等の審査」に

		向けて、他大学との共同研究等を推進していく。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	変更申請した3名中2名の認定があった。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も継続的にヒアリングを行っていく。また、未承認の若手教員に対し、研究力強化プログラムを案内する。また、未承認の若手教員の指導実績を積むため、積極的に指導補助教員として登録することを呼びかける。

(b) 科研費と外部資金について

番号	項目	内容
	取組事項	科研費採択率向上
	P【計画】	科学研究費助成事業の応募及び採択率を向上させるために、プロジェクト・チームを設置する。更に、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び講演会等の積極的な活用を促す。
	D【行った活動】	採択率を向上させるためにプロジェクト・チームによる査読を行い、教職員に対して適切な指導・助言等の支援を行った。教員に対して第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び講演会等の受講を促した。
1	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和5年度科研費の採択件数は9件で、前年度より4件増加した。令和6年度科研費への申請件数は63件であった。また、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニングに1名の教員が参加した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	次年度以降もチームによる査読を行い、申請書をブラッシュアップし採択率の向上を目指す。更に、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び国立高専科研費申請書査読者ネットワークによる科研費研究計画調書の査読システムの積極的な活用を促す。

1.2.3 社会連携（企業との連携）

(a) 企業との連携について①

番号	項目	内容
	取組事項	NEC との連携状況の把握
	P【計画】	令和6年度開講予定のリベラルアーツⅡにおいて NEC との共同教育を盛り込んだ授業内容を計画する。
	D【行った活動】	NEC 担当者と打ち合わせを重ね、具体的な授業内容を検討した。
1	C【得られた成果及び自己評価の理由】	具体的な授業内容について検討することができたが、今後も詳細を検討する必要がある、令和6年度開講に向けて準備する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も引き続き、NEC との連携を推進していく。

1.3 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

1.3.1 社会連携

(a) 自治体等との連携について

番号	項目	内容
1	取組事項	教育における自治体との連携
	P【計画】	リベラルアーツⅠのテーマの一つを「霧島市の問題解決」として、霧島市のDX推進課の職員に延べ5回の授業をしてもらい、問題点を学び解決方法を議論する。
	D【行った活動】	霧島市DX推進課に延べ5回授業をしてもらい、グループで問題点を学び解決方法を議論した。また、グループワークの結果をプレゼンコンテストとして文化祭で発表した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	学生が地域の問題に目を向けるだけでなく、具体的な内容を積極的に議論し、かつ、問題解決のアイデアを出すことを実際に体験し、通常の座学では学ぶことができない学修を行うことができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	自治体との連携教育に今後も力をいれていく。
2	取組事項	技術士会との共同教育
	P【計画】	鹿児島県技術士会と本校との共同教育を全学科で実施する。
	D【行った活動】	令和5年11月15日に鹿児島県技術士会から5名の講師を招き、本科2年生を対象に技術士会との共同教育（キャリア教育）を実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	講師それぞれの専門も絡めた講演をおこなっていただき、技術者として一線で活躍されている方の講演は、学生がこれから技術者として成長するための大いに参考となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	鹿児島県技術士会との関係は良好であるため、今後も継続して共同教育を進めるとともに、新たな取り組みも模索する。
3	取組事項	霧島市、日置市、始良市との連携
	P【計画】	霧島市教育委員会（志学館大学含む）と連携し、生涯学習講座ニューライフカレッジ霧島「隼入学」を開催する。 日置市主催で例年開催される「企業の魅力説明会」に参加し、日置市の担当部署と意見交換を行う。 始良市主催のAIRAふるさとチャレンジャーにおいて、理系教育講座の開催を担当する。
	D【行った活動】	ニューライフカレッジ霧島「隼入学」は全10回の講座を行った。（令和5年5月13日、6月10日、7月8日、8月19日、9月9日、10月14日、11月11日、12月9日、令和6年1月13日、2月10日） 日置市主催の事業には参加できなかったが、令和6年3月12日に日置市にある企業2社を教職員及びKTC会員企業40名が見学をした。実施に併せて、企業及び日置市との連携を深めるため

		に地域の企業が抱える課題等について意見交換を行った。 あいら若者まちづくり会議（令和5年8月23日）に学生代表3名が参加した。またAIRAふるさとチャレンジャーの「工学チャレンジ！」（令和5年9月16日）として、小学生30名を受け入れて、5つの講座を開催した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	ニューライフカレッジ霧島「隼人学」は高等教育機関と自治体が連携して開催する全国でも例を見ない取組であり、優れた運営と学習成果が地域の活性化に寄与すると評価され、全国市民大学連合から優良市民大学として認定されている。前半は本校で開催し、鹿児島高専のPRにもつながった。 日置市の企業関係者等と意見交換を行うことで、日置市の将来ビジョンや日置市地域の企業が抱える課題等について情報収集することができた。 始良市教育委員会と連携して小学生への理系教育を行い、地域貢献・人材育成につながる取り組みができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している。
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も継続して霧島市、日置市、始良市と協力し各事業を行い、地方創生・地域貢献に繋がる活動を行っていく。
4	取組事項	委員等による自治体との連携
	P【計画】	各自治体主催の委員会に委員として参加する。
	D【行った活動】	各種外部会議等に委員として参加した。 ・霧島市ふるさと創生有識者会議 ・鹿児島県工業技術センター研究開発推進会議 ・かごしま産業支援センター新事業進出支援事業審査会 等
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	各種委員会・会議に参加して、自治体（地域）の活性化を推進する施策・取組に対する助言や、県内企業に対する技術支援等のアドバイスをを行った。本校の学識的な知見を提供するとともに、地方自治体や県内企業が抱える課題解決に向けた取り組み等について理解することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も継続して各外部委員会・会議に参加し、「地域に根差した鹿児島高専」としての活動を継続していく。
5	取組事項	キャリア教育における自治体との連携
	P【計画】	地方創生特別講義として、霧島市、日置市、始良市に、2年生に対して特別講義を実施していただく。
	D【行った活動】	地方創生特別講義として以下のとおり実施した。 ・令和5年11月22日 霧島市、日置市、始良市（対象：本科2年生）
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	地方創生に向けた霧島市・日置市・始良市独自の取り組みやOBからのアドバイス等についての講演を聴くことにより、学生からは「地方創生についてもう少し詳しく知り、地域に少しでも貢献したいと思った。」等の意見が寄せられ、学生にとって有意義な特別講演となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している

	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果を踏まえて、令和6年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。
--	---------------------------	---

(b) 鹿児島高専テクノクラブ (KTC) について

番号	項目	内容
1	取組事項	KTC 企業見学状況等の KTC によるキャリア教育の実施状況、成果の把握
	P【計画】	KTC 企業によるキャリア教育として、3 年生を対象に KTC 企業先を訪問する企業見学、1 年生を対象に KTC 企業による特別講義を行う。また、本科 4 年生、本科 1～3 年生（希望者）、専攻科 1 年生（希望者）、保護者（希望者）を対象に地域企業研究会を行う。成果についてはともに実施後のアンケートを行う予定である。
	D【行った活動】	KTC 企業による「地域企業特別講義」「地域企業研究会」を以下のとおり実施した。 ・地域企業見学 令和 6 年 12 月 13 日（本科 3 年生） ・地域企業特別講義 令和 6 年 11 月 15 日（本科 1 年生） ・地域企業研究会 令和 6 年 12 月 5 日（本科 4 年生全員、本科 1～3 年生（希望者）、保護者（希望者）） ともに終了後はアンケートの実施・集計を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	地域企業見学、地域企業特別講義ともに予定通り実施した。企業の現場の様子や地域企業について知る機会となり、学生にとって学びのモチベーションを高めるきっかけとなった。また、業界の動向・本校 OB の業務内容やアドバイスを聴くことにより将来のキャリアについて考える機会となった。 地域企業研究会は、1～3 年生及び保護者の希望者も対象として実施し、早い段階から地域企業について知る機会を提供した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和 6 年度も継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、実施に向けて事業内容等の改善を図る。
2	取組事項	共同研究実施状況の把握
	P【計画】	共同研究については新規の共同研究契約があった際には、令和 4 年度より継続して、企画係にて一覧を作成し、校務連にて報告する。
	D【行った活動】	共同研究について一覧を作成し、校務連で報告を行っている。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	共同研究の受入れ実績について、毎月の校務連で報告を行うことができた。これにより、外部資金等の現状を確認することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和 6 年度も継続して、共同研究一覧を作成、校務連にて報告を行う。

3	取組事項	KTC 事業実施状況の把握
	P【計画】	KTC 事業に関する年間計画を検討する。事業の実施方法等についてはKTC 三役に相談し、テクノセンタースタッフ会議にて実質的協議を行う。
	D【行った活動】	令和5年4月10日、7月18日、12月7日、令和6年2月22日にKTC 会長、副会長と会議を行った。事業の実施方法についてテクノセンタースタッフ会議を行い、令和6年2月末時点で21回開催している。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	KTC の各事業については、その都度、会長、副会長及びテクノセンタースタッフで協議し、会長・副会長の意向を汲みながら、事業を実施することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も状況を踏まえて柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、令和6年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。

(c) 企業との連携について②

番号	項目	内容
1	取組事項	京セラ株式会社との連携
	P【計画】	令和4年度に締結した京セラ（国分工場）との連携協力に関する協定を基に、具体的な企画を実施する。
	D【行った活動】	3件の工場見学（令和5年12月13日 情報工学科3年、令和6年1月24日 電気電子工学科2年、令和6年1月25日 機械工学科・制御工学科4年）、及び関連科目での出前講義（令和5年12月11日 機械工学科3年 電子回路）を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	具体的な企画を実施することができている。
	自己評価	A：計画通りに進行している。
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度には、令和5年度の企画に加えて本校OB 社員による講話などの企画を1つ以上実施する。

1.3.2 学生支援

(a) 学生支援体制について⑤

番号	項目	内容
1	取組事項	地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、錦江スポーツクラブ、Robogals）
	P【計画】	地域に根差した特色ある取り組みの推進を行うため、課外活動の支援を行う。
	D【行った活動】	メカトロニクス研究部が鹿児島市立科学館における公開講座を実施し、令和6年2月26日に富隈小学校に、令和6年2月27日から2月29日に屋久島の一湊小学校、安房小学校、神山小学校を訪問し、ロボットを活用した実演等を行った。 吹奏楽部が令和5年7月13日～15日に大隅半島南部の小学校、保育園にて演奏訪問を行った。

	隼人スポーツフェスタにサッカー一部の学生が補助員として参加し、幅広い年齢層の地域住民との交流を図った。 隼人錦江スポーツクラブへの学生への参画については、サッカー、バドミントン、陸上、ソフトテニスを通じて近隣の地域住民との交流が活発に行われた。 Robogals の活動としては、離島の複数の小・中学校や、県内の小学校及び大隅青少年自然の家で Robogals Kagoshima のワークショップを実施した。また、佐世保高専の Robogals Sasebo の立ち上げ支援を行い、九州内の高専と連携して取り組みを行った。 サイバーセキュリティボランティアの活動としては、始良市、霧島市、屋久島町の小中学校を訪問して活動を行い、後援会と調整し、支援を行った。 正門前の真孝公民館花壇の整備について、今年度は学生会及び寮生会の学生を中心に地域住民と一緒に実施した。
C【得られた成果及び自己評価の理由】	Robogals やサイバーセキュリティボランティアの活動を通して、離島の小中学校を積極的に訪問することで、STEAM（科学・技術・工学・数学）を学ぶ楽しさを伝えることができた。また、スポーツを通じて、地域に根差した取り組みを多く行うことができたことで、近隣の地域住民との交流が活発に行われた。
自己評価	A：計画通りに進行している
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も学生委員会を中心として、学生を活用した地域貢献について検討していくとともに、新型コロナウイルス感染症の影響で複数年実施できていない活動に対し、支援を行っていきたい。

2. ミッション以外の取り組み

(a) 魅力ある鹿児島高専への取り組み

番号	項目	内容
1	取組事項	鹿児島高専魅力向上プロジェクト・チームの設置
	P【計画】	鹿児島高専魅力向上プロジェクト・チームの任期は、厚生会館1Fの改修が終了する令和5年9月までとなっている。今後は、それぞれの基金を運用する部署において有効な活用を行う。
	D【行った活動】	厚生会館1F、2Fの魅力化のための改修が完了した。改修にかかる材料費高騰の影響により、学生生活改善の基金を減額した予算配分をプロジェクト・チームで審議し、運営会議で了承を得た。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	寄附金を用いた鹿児島高専魅力化に取り組むことができた。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	鹿児島高専魅力向上プロジェクト・チームの任期満了のため、本プロジェクトにおける令和6年度の課題はない。今後は、寄附金が配分されている国際交流、学生活動支援のそれぞれの基金について、鹿児島高専の学生に対して有効に活用する。
番号	項目	内容
2	取組事項	1年生への混合クラス、創作活動、工学基礎実習の導入状況の把握
	P【計画】	2年生へ混合クラスのアンケートを実施し、創作活動、工学基礎実習の改善点等を把握する。
	D【行った活動】	総務企画委員会が令和5年8月に2年生に対して混合クラス、創作活動、工学基礎実習に関するアンケートを実施し、12月の総務企画委員会にて結果を報告、各学科に認識の共有を図った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	1年生混合クラス、工学基礎実習において「とても満足」「やや満足」の回答が9割を超え、創作活動においては「どちらともいえない」の回答を含めれば9割以上の好意的な回答が得られた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度においても引き続き混合クラスへのアンケートを実施し、創作活動、工学基礎実習の改善点等を把握する。

(b) 各学科のPDCA実施

番号	項目	内容
1	取組事項	各学科のPDCA実施状況の把握
	P【計画】	令和3年度から引き続き、各科・学科についてもPDCAを実施することで、各科・学科での目標の共有化、協働を促進し、教育での発展的な活動を行う。
	D【行った活動】	各科・学科のPDCAを作成し、令和5年5月16日の第3回総務企画委員会にて報告された。計画に基づき、各科・学科で取り

		組む。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	自己点検・評価委員会にて、各科・学科のPDCA実施状況を点検・評価し、報告を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も各科・学科のPDCAを実施する。

3. 管理運営

3.1 管理運営

(a) 教育組織について

番号	項目	内容
1	取組事項	女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握
	P【計画】	女性教員比率（令和5年5月1日現在） 機構全体：（機構ホームページ未掲載）% 本 校：7.1% 機構全体の比率を目標値とし、引き続き教員の公募文にポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。
	D【行った活動】	令和5年度に行った教員公募において、公募文にポジティブアクション※2）を記載して公募した。 ※2）ポジティブアクション：積極的格差是正措置。男女間の差別を解消して、働く意欲と能力のある女性が活躍できるように、企業が自主的に行う取り組みのこと。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和5年度の13件の教員公募において、女性限定公募を1件行い、1名採用に至った。また全24名の応募者中、女性応募者は3名であった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も引き続きポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。
2	取組事項	女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握
	P【計画】	・志願倍率（女子生徒）の増加に向けた取組を行う。 ・Robogals 鹿児島島の学生による小中学生対象のワークショップを行い、理工系を目指す女子を増やす取り組みを行う。
	D【行った活動】	学校説明会や中学生向けパンフレットでは、女子学生が活躍している話題を多く取り入れて説明を行った。 また、一日体験入学ではRobogalsのワークショップ、並びに女子学生のための茶話会も開催し、多くの女子生徒に学校のPRを行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	女子生徒の志願者は62名で過去最高となり、取り組みが奏功していると考えている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。 アンケート結果を考慮し、ソフト、ハード両面から継続して女子学生向けの設備整備を進める。

(b) FD研修、表彰、SD等について

番号	項目	内容
1	取組事項	教員相互の授業参観の改善
	P【計画】	公開授業（教員相互による授業参観）を前期と後期にそれぞれ実施し、教員の授業力向上並びに教員相互の交流を深める。参観後の「公開授業アンケート」の修正を検討する。

	D【行った活動】	令和5年6月22日～7月12日と同10月30日～11月17日の日程で公開授業を実施した。「公開授業アンケート」については、質的側面を重視し自由筆記のみとした。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	前期と後期を合わせた参加率（1回以上の参観）は88.4%で、令和4年度の参加率89.9%と同程度であった。実施担当者（総務企画主事補）より、各教員に「公開授業アンケート」によるフィードバックを行った。また、公開授業参観者は、授業実施者に対して「公開授業メモ」を渡した。
	自己評価	A：計画通りに進行している。
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度も、公開授業を前期と後期に実施する予定である。また、現行の公開授業の形が恒常化するにつれて、その効果が限定的になっている点が懸念されるため、実施内容について検討する。
2	取組事項	教育力の質の向上のための研修等
	P【計画】	教室に設置する遠隔授業用カメラを用いた新しい授業方法について検討する。
	D【行った活動】	今年度は授業評価アンケートで高評価の一部科目を録画し、教員研修の一環として使用することとした。次年度は更なる活用方法について検討する。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	授業評価アンケートで高評価の科目について授業実施方法を教員へ共有するとともに、教室設置カメラの使用法の一例を示すことができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も新たな活用方法について検討する。
3	取組事項	遠隔授業の質の向上のための研修等
	P【計画】	コロナ対応だけでなく、様々な場面で遠隔の手法を使った授業を展開するため、遠隔授業用カメラを導入する。
	D【行った活動】	遠隔授業用カメラが導入された教室において、遠隔による研究授業のために授業を録画した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	遠隔授業用カメラの導入が12クラスのみとなっており、遠隔授業の質向上のための機材が不足している。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	設置されたカメラを使った授業を録画することにより、これまでより簡単に遠隔授業を録画、配信できるようにしていく。
4	取組事項	学生による授業アンケートの把握
	P【計画】	授業アンケートを実施し、今後の授業改善へ繋げる。
	D【行った活動】	授業アンケートを実施し、その分析結果を教務委員会で報告し、今後の授業改善へ繋げている。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	学校指定のアンケート以外でも同様の手法を用いて、各教員が独自に授業に関するアンケートを実施し、改善に結び付ける動きがみられた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度以降も引き続き、授業改善に向けた取り組みを行う

	題（改善）への方針】	ていく。
5	取組事項	FD フォーラム・FD レクチャーシリーズの開催
	P【計画】	鹿児島高専FD フォーラム、鹿児島高専FD レクチャーシリーズを実施し、教育能力の向上及び知識の共有を図る。
	D【行った活動】	【鹿児島高専FD フォーラム】 (1) 校長裁量経費を頂いた先生方の研究の取り組みの紹介（令和5年5月） (2) 高専が抱える課題と危機管理、高専教育の質保証と学生支援（令和5年9月） (3) 校長裁量経費を頂いた先生方の研究の取り組みの紹介（令和5年10月） (4) 事務職員等SD 業務改善型研修（令和6年1月） (5) 行動を変えて意識を変える～地域の現状や霧島あるあるジェンダーの取組から（令和6年2月） 【鹿児島高専FD レクチャーシリーズ】 (1) オンライン英会話講座（令和5年8月～9月） (2) オンライン英会話講座（令和6年2月～3月） (3) ニューフェイスセミナー (4) 新担任研修
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	鹿児島高専FD フォーラム、鹿児島高専FD レクチャーシリーズともに充実した内容での実施がなされている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度も充実した鹿児島高専FD フォーラム、鹿児島高専FD レクチャーシリーズを計画して実施する。
6	取組事項	新任教職員研修（SD 関連）
	P【計画】	本校独自の新任職員研修を企画する。
	D【行った活動】	新任職員に対する事務職員・技術職員SDに関する基本方針に基づき提供しているオンライン研修の受講を実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	受講した職員から好評を得た。 年度当初に実施される機構本部主催の研修は、採用時期により受講が遅れることがあったが、適切な時期に受講することができたため好評価を得やすかったと考える。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	研修講座を精選し受講者の研修効果のフィードバック方法を検討する。
7	取組事項	ハラスメント防止（SD 関連）
	P【計画】	ハラスメントの防止に関する啓発のため研修を企画する。
	D【行った活動】	高専機構本部、本江理事長特別補佐による、ハラスメント防止を含めた高専が抱える課題と危機管理についての講演を実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	高専機構本部の見解や今後の方針について確認することができた。

		本部の動向等を直接伺う機会は限られており、貴重な講演となったと考える。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	研修による防止啓発と講演以外の研修を検討する。

(c) 自己点検・評価

番号	項目	内容
1	取組事項	各規定の制定
	P【計画】	令和3年度に各種アンケートの実施について、実施部署、実施期間等を定めた通り、令和5年度は卒業生アンケート、在校生満足度アンケートを実施する。
	D【行った活動】	卒業生アンケート、在校生満足度アンケートを実施した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	卒業生アンケートは教務委員会、在校生満足度アンケートは学生委員会が実施し、アンケート結果を各委員会において報告した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度は、卒業生アンケート、在校生満足度アンケートを実施する。企業アンケートは令和7年度に実施する。
2	取組事項	PDCAに基づいた評価の必要性（PDCAサイクルの再構築）
	P【計画】	自己点検・評価報告書をPDCAの項目で記載して、各部署、各評価項目のPDCAサイクル実施状況を確認する。特に、自己点検・評価委員会の機能を強化し、各部署の責任者によるブリーフィングを行い、PDCAサイクルの実施状況を確認、共有する。
	D【行った活動】	科・学科も含めて各部署においてPDCAを実施し、自己点検・評価委員会にてPDCAサイクルの実施状況を確認した。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	各部署からの自己点検・評価報告書の内容でPDCAサイクルの実施状況を確認し、自己点検・評価委員会において実施状況の認識の共有を図った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和6年度もPDCAサイクルの実施、確認を行う。
3	取組事項	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について
	P【計画】	今年度の満足度調査の計画はなし。
	D【行った活動】	実施方法の検討を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	実施方法の検討を行った。問題はないと考える。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	次回は、令和7年度に満足度調査を実施し、結果を教育改善等に役立てていく。

4. 各外部評価の指摘事項の改善点

4.1 指摘事項

(a) 本校としての中期目標、長期目標を設定し、その目標に対する重点項目を明確にした本校独自の自己点検・評価の実施

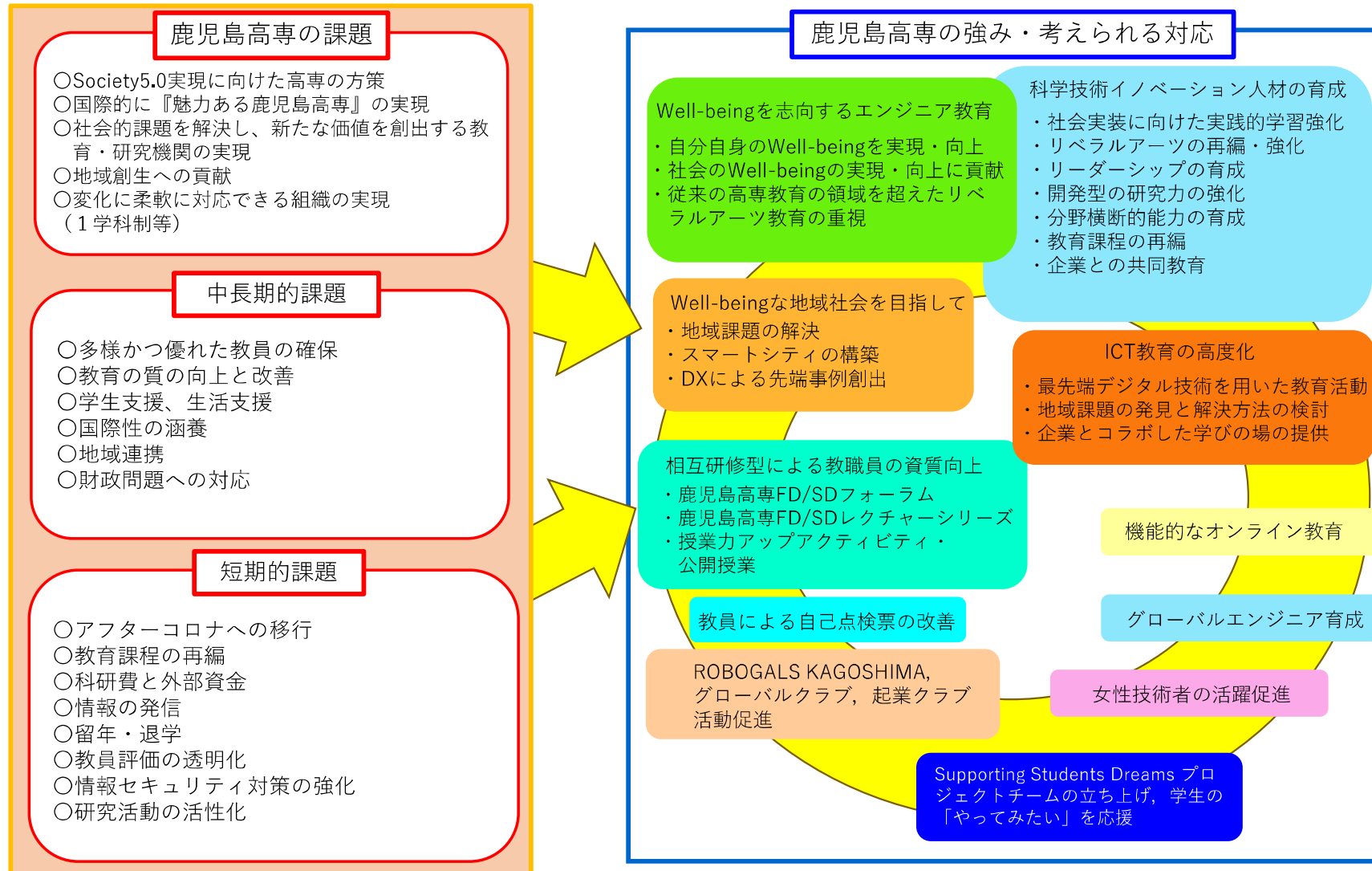
番号	項目	内容
1	P【計画】	別紙資料（資料1）に示す通りとなる。
	D【行った活動】	個別の活動については、自己点検・評価報告書の各項目を参照。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	令和4年度からは混合クラスを導入し、新たな形での教育を開始した。また、令和4年度入学者からは新カリキュラムとなっており、新しい形式での教育を開始している。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	変化を続けて、学生・教職員ともに成長できる取り組みを継続する。1学科制を導入し、同時に、地域の特色となる教育機関として成長する。

(b) 外部評価委員の事前質問の情報共有

番号	項目	内容
1	P【計画】	次回の外部評価委員会（令和6年6月開催予定）では、事前に委員の方々へ、質問事項等の共有を図る。具体的な共用方法としては、Microsoft365のTeamsを利用し、外部評価委員のチームを作成し、そこへ質問事項を投稿して頂くこと等を検討する。
	D【行った活動】	実施方法の検討を行った。
	C【得られた成果及び自己評価の理由】	実施方法の検討を行った。特に問題はないと考える。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	6月の外部評価委員会を実施する際にTeamsを利用した事前質問の情報共有を行う。

鹿児島高専における課題対応図

補足資料



令和6年度 外部評価報告書

鹿児島工業高等専門学校

目 次

1. はじめに（校長挨拶）	・ ・ ・ 2
2. 外部評価委員会の概要	
(1) 令和6年度外部評価委員会委員名簿	・ ・ ・ 3
(2) 令和6年度外部評価委員会出席者名簿（鹿児島高専）	・ ・ ・ 4
(3) 令和6年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領	・ ・ ・ 5
(4) 鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則	・ ・ ・ 6
3. 外部評価委員による事前質問及び本校からの回答	・ ・ ・ 7
4. 外部評価委員による評価結果（委員長による講評）	・ ・ ・ 18
5. 議事要旨	・ ・ ・ 20

1. はじめに

鹿児島工業高等専門学校は、令和5年に創立60周年を迎えました。昭和38年の設置以降、15歳の中学卒業生を受け入れ5年一貫教育を基本としながら、時代の変化と社会の期待に応え、大学編入、専攻科の設置などの組織制度を整備することで、多様なキャリアパスをもつ高等教育機関へと発展してきました。その発展は、本校の力だけで成し遂げられるものではなく、地域や産業界など多方面からのご支援やご助言をいただいていることによります。このように外部からのご助言は、本校の現状認識と将来計画にとって、なくてはならないものとなっております。

令和6年6月12日(水)に学外有識者の方々に本校の現状をご理解いただき、その上でご意見およびご提言をお願いするため外部評価委員会を開催いたしました。本校の外部評価委員会は令和4年までは毎年開催しておりましたが、以降は隔年開催となり、今回は2年ぶりの開催となりました。その間、氷室前校長のもとでスタートしたWell-beingを志向する高専教育の考えを引き継ぎ、まずは本校構成員一人一人が「Well-beingとは何か、そしてそれをどのように実現するか」を自分ごととして捉えることを目指して学校運営を行なっていました。

今回の外部評価にあたっては、独立行政法人国立高等専門学校機構(高専機構)に提出した令和5年度の年度計画・実績を再整理し、自己評価を加え、外部評価委員会の事前資料としました。また委員会当日は、本校の教職員が鹿児島高専の現状についてご説明申し上げ、貴重なご意見を賜りました。本報告書では、説明の概要と共にその際に行われた質疑応答やご提言等の内容をまとめております。

ご多用の中、本校の運営状況の説明に傾聴いただき、また貴重なご意見等を頂戴しました鹿児島大学工学部長木方十根様をはじめ評価委員の方々に本紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。外部評価委員会でいただいたご意見やご提言をもとに、鹿児島高専の更なる発展にむけ一丸となって邁進いたします。

鹿児島工業高等専門学校
校長 上田悦子

2. 外部評価委員会の概要

(1) 令和6年度外部評価委員会委員名簿

外部評価委員

役職名	氏 名
第1号委員 鹿児島大学 工学部長	き かた じゅん ね 木 方 十 根
第2号委員 霧島市教育委員会 教育委員	いけ だ こう いち 池 田 浩 一
第2号委員 霧島市立牧之原中学校 校長	たなか いそこ 田中 伊礎子
第3号委員 鹿児島県工業技術センター 所長	おのまえ ひろし 尾 前 宏
第4号委員 (株)九州タプチ 代表取締役社長 鹿児島高専テクノクラブ会長	つるがの み お 鶴ヶ野 未 央
第5号委員 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長	やまぐち とし き 山 口 俊 樹
第6号委員 イーストベンチャーズ株式会社フェロー	おおしば たかのり 大 柴 貴 紀
第6号委員 (株)末広 代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長	すえひろ こうじ 末 廣 浩 二

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

(2) 令和6年度外部評価委員会出席者名簿（鹿児島高専）

職 名	氏 名
校 長	上 田 悦 子
副校長(教務主事)	玉 利 陽 三
副校長(総務企画主事)	岸 田 一 也
校長補佐(学生主事)	北 薊 裕 一
校長補佐(寮務主事)	椎 保 幸
校長補佐(研究主事・専攻科長)	新 田 敦 司
校長補佐(国際交流センター長)	徳 永 仁 夫
校長補佐(地域共同テクノセンター長)	武 田 和 大
学科長(機械工学科)	杉村 奈都子
学科長(電気電子工学科)	井 手 輝 二
学科長(電子制御工学科)	鎌 田 清 孝
学科長(情報工学科)	入 江 智 和
学科長(都市環境デザイン工学科)	山 田 真 義
学科長(一般教育科)	拜 田 稔
総務企画主事補	佐 藤 正 知
総務企画主事補	谷 口 康太郎
事務部長(学生課長兼任)	執 行 正 一
総務課長	原 田 達 意
総務課長補佐	中 村 浩太郎
学生課長補佐	柳 詰 豪

(3) 令和6年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究活動等の評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

3. 外部評価委員

- | | |
|------------|--------------------------------|
| (1) 木方 十根 | 鹿児島大学 工学部長 |
| (2) 池田 浩一 | 霧島市教育委員会 教育長 |
| (3) 田中 伊礎子 | 霧島市立牧之原中学校 校長 |
| (4) 尾前 宏 | 鹿児島県工業技術センター 所長 |
| (5) 鶴ヶ野 未央 | 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タプチ 代表取締役社長 |
| (6) 山口 俊樹 | 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長 |
| (7) 大柴 貴紀 | イーストベンチャーズ株式会社フェロー |
| (8) 末廣 浩二 | 鹿児島高専同窓会長 (株)末広 代表取締役社長 |

4. 外部評価日時

令和6年6月12日(水) 14:00~16:45

鹿児島工業高等専門学校 学年横断学科縦断講義室(図書館2階)

5. 事前配付資料

- (1) 令和5年度 自己点検・評価報告書
- (2) 事前質問及び回答

6. 日程

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 委員及び本校出席者の紹介
- (4) 委員長選出
- (5) 自己点検・評価報告書の説明
- (6) 質疑応答
- (7) 外部評価委員打合せ
- (8) 講評及び閉会

(4) 鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

(設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

(組織)

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

(委員の委嘱)

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

(運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

3. 外部評価委員による事前質問及び本校からの回答

鹿児島工業高等専門学校
自己点検・評価報告書 事前質問票
委員名：大柴

評価項目等	-志願者の確保（特に女子学生の確保）-
ご意見 ご質問等 その他	女子学生志願者が過去最高の 62 名とのことで、アクションが結果に実って素晴らしいことだと思いました。志願者数、合格数、入学数、新入生男女比などそれぞれ目標数値があったかもしれませんが。もしあれば資料に載っているといいなと思いました。 私の属するスタートアップ業界においても「女性の起業家の少なさ」が度々問題になります。女性起業家を増やすために「ファンドの 20%は女性起業家に割り当てる」等の施策をしているベンチャーキャピタルもありますが、現状機能しているかどうかは不明です。私自身は担当する起業家に女性比率が多いのですが、それでも 10%程度です。また、女性の エンジニアの少なさも問題になっています。ぜひ鹿児島高専がその解決の糸口を見つけて くれることを期待しています。

回答

高専機構では、高専における女子学生比率が低い現状に鑑み、次代を担う女性技術者を育てるため、女子学生 の在籍比率向上を図ろうとしています。入学者に占める女子比率が 35%以上となることを目標としつつ、在籍 比率の向上を目指して志願者確保に向けた取組を推進することになっています。本校においても 5 年後には入 学者に占める女子比率が 35%以上になるように取り組んでいきます。

そのための方策として

1. Robogals Kagoshima を中心とした女子学生の活動として、本校の一日体験入学や小中学校に出向いてのワークショップを開催すること。
2. 一日体験入学で女子生徒のための茶話会を開催し、本校女子学生と女子中学生とその保護者が飲食しながら気軽に情報交換を行う機会を提供すること。

を実施しています。

さらに、改組が控えており、情報系のコースを増やすことにより女子学生の増加を見込んでいます。加えて AO 入試（仮）を導入することにより、自立心を持ち、何事にも積極的に取り組む姿勢をもつ学生を入学させることにより、女子学生の増加を目指します。

評価項目等	-キャリア支援 -
ご意見 ご質問等 その他	質問ではなくコメントになってしまいますが、アクセラのメンターとして昨年度関わらせていただきましたが、キャリア支援文脈でも価値提供できるのではないかと考えています。「起業」という選択肢、「スタートアップ」という選択肢などを伝えることで学生の世界が広がれば良いと思っています。

回答

スタートアップ教育については、本校にとっても新しい教育となります。学内全体に対するスタートアップの啓発（スタートアップ教育講演会）と、関心の高い学生に対する「起業クラブ」の活動と両面からの施策を継続したいと考えています。委員のご意見の通り、「スタートアップ」という選択肢により、学生の世界が広がることで本校のテーマとして掲げている Well-being につながることを期待しています。

評価項目等	-交流プログラム(派遣、受入)-
ご意見 ご質問等 その他	昨今の円安もあるので、しばらくは「受け入れ」の強化をしてもいいのかもしれないですね。

回答

「受入れ強化」あるいは「キャンパスのグローバル化」は、1つの目標でもあります。具体的な取り組みとして、2022年度、2023年度は、「持続可能な社会構築への貢献のための科学技術に関する日本セミナー（JSTS）」を鹿児島にて開催しました。2024年度は「Kosen Global Camp」を開催します。鹿児島高専に20名程度の海外大学生等を招待し、九州地区高専の学生と共同で課題解決に取り組むハッカソンを行う予定です。その他、科学技術振興機構の国際青少年サイエンス交流事業である「さくらサイエンスプログラム」なども活用し、より多くの海外学生を受け入れる計画を進めています。

評価項目等	-リモート会議への「ながら参加」への対策検討-
ご意見 ご質問等 その他	各企業同様の問題が学校でもあるんですね。対策の取り組み、素晴らしいと思います。同時に会議体の見直しなどもやられてもよろしいかもしれませんね。

回答

高等教育機関の教員だからこそ、かえって企業以上に問題は深刻なのかもしれません。ご助言をいただき、ありがとうございます。会議体の見直しについては検討したいと考えます。

評価項目等	
ご意見 ご質問等 その他	素晴らしい取り組みだと思います。学生側からのアクションがしやすくなったのではないかと思います。一方で日常的な教師側の注意や気づきということも大事だと思っています。その辺りの取り組みや意識していることはございますでしょうか？

回答

本校に限らず高専機構全体の取り組みとして、毎年4月に担任・専攻長による、全学生への個人面談を実施し、学生の悩みや困り事などを把握、そして相談室との共有を行っています。個人面談については、この年度当初以外でも、担任によりますが、年に2、3度実施している教員も少なくありません。

また、それとは別に、HyperQUなどの様々なアンケートを実施し、その結果についても担任と相談室で共有し、日々学生のメンタル面の把握に努めています。

他方、本校は課外活動が非常に盛んで、部活動の顧問も日々学生の様子を観察し、何か問題を感じたら、担任や相談室と情報を共有しており、ひとりの学生に対して多くの教員の目が向けられているのも、本校の特徴です。

評価項目等	
ご意見 ご質問等 その他	素晴らしい取り組みだと思いますし、次年度以降も継続して改善していくと、より大きな効果を生みそうです。女子学生の様子を PR するのも良いですが、その先、女子の卒業生がどのような職場でどのような業務で活躍しているかを見せることも志願者増につながるかもしれないなと思いました。

回答

ご指摘のとおり女子卒業生の活躍を具体的に例示することは女子受験生へのアピールには非常に重要であり、実際に、本校 HP 内の機械工学科のページにおいて女子卒業生の声を掲示しています。このページの拡充と合わせて、受験生への本学 PR 誌（「中学生のみなさんへ」）にもページを割くなど、今後もさらに女子卒業生の活躍を積極的にアピールしていきます。

また、女子学生には進学を希望する者も増えてきており（現 4 年生 5 名のうち 3 名は編入学希望）、その実績をアピールするとともに、進学実績の拡大にも学科として努めていく必要があると個人的には考えています。たとえば専攻科への進学と、その先の大学院への進学の道筋を整えることも（推薦進学の協定締結など）、これは当然男子学生にも平等に提供されるべきサービスですが、教育現場の責務であろうと考えています。

女子学生の志望者数を増やす準備として、①そもそも機械工学科に入学したいと考える理系を得意とする女子学生が、それをためらう理由を取り払う ②理系に進もうとことさら思わなかった女子学生に興味を抱くきっかけを与え、理系に進もう、本学高専を選択しようと思わせる、の 2 点が挙げられると思います。

この双方に有効であろう、すなわち本学本学科を広く認知してもらい興味を抱いてもらえるようにする手立てとして、一般公開（1 日体験入学）、公開講座、出前講座の拡充が考えられます。昨年度の様子を見ましても、このような講座への参加が、受験、入学行動につながっていることは明らかで、逆にこの講座への参加により別の高校へ受験生が流れるということがないように注意する必要があります。

次に、女子学生の入学前、入学後のモチベーションを高めることが大事であると考えます。すでに学校として学習環境整備（女子学生共有スペースの設置、更衣室の設置、快適安心な寮生活の提供）は進められており、学科としても全女子学生の交流会（女子茶話会）を定期的実施しております。現時点で女子学生は比較的成績が良好な傾向がありますが、学びのつまずきのフォローに男子学生とは違ったアプローチが必要であるかどうかなど、学生の意見を聞きながら調査を進め、対応できればと考えています。

鹿児島工業高等専門学校
自己点検・評価報告書 事前質問票
委員名：田中 伊礎子

評価項目等	1.1.2 教育の成果 (a) 本科の教育の成果について
ご意見 ご質問等 その他	1 取組事項...留年率、退学率の改善の方策 ・留年率や退学率がどれくらいで、理由はどのようなものか。 ・対応として、早期の再評価が上げられているが、教育相談のようなものが行われているのか。

回答

令和 5 年度は、留年率は 3.45%、退学・転学率は 1.63%で計 5.08%、令和 4 年度は、留年率は 2.67%、退学・転学率は 2.38%で計 5.05%、令和 3 年度は、留年率は 1.35%、退学・転学率は 3.37%で計 4.47%です。退学・転学の理由としては、「学力不振」がほとんどであります。中には「学校生活不適應・修学意欲の低下」もありました。

また、経済的困窮により学業とアルバイトの両立を図ったが困難であったため通信制の高校へ転学していく学生も少なからずおります。一方、留年の理由としては、退学・転学の理由と同様に「学力不振」がほとんどですが、「学校生活不適應・修学意欲の低下」もあります。対応策として、まずは、担任による面談を行い、必要に応じて学生なんでも相談室でカウンセリングを行なっています。

評価項目等	1.1.2 教育の成果 (a) 本科の教育の成果について
ご意見 ご質問等 その他	2 取組事項...入試倍率の把握 ・ 県内の中学校で行われる上級学校説明会には、どのくらいの数の学校に出向いていて、どのような内容の説明があるか。

回答

入試広報プロジェクトチームが令和 5 年度において 68 校の中学校に出向いて説明しています。内容としては、高専と普通高校ならびに工業高校との違い、学科の紹介、卒業生の進路状況、卒業生の活躍状況、部活動、女子学生の活躍状況、学生寮、海外研修プログラム、入学試験、一日体験入学、中学生ならびに保護者のための説明会、高専祭について案内しています。入試広報プロジェクトチームの教員が説明することにより、本校の魅力を十二分に届けられていると考えています。

鹿児島工業高等専門学校
自己点検・評価報告書 事前質問票
委員名：鶴ヶ野 未央

評価項目等	全般
ご意見 ご質問等 その他	令和 2 年度から新たなセルフアセスメント方式に変わって 4 年が経過し、PDCA のサイクルが定着してきたように思います。そのような中で今回の点検・評価報告書の中には記載がありませんでしたので敢えてお伺いします。 鹿児島高専の掲げるミッション実現に向けた学校全体の KPI (key Performance Indicators) ならびに各部署の重点項目に対する達成度合いをプロセス指標として、定量的に評価できるものは数値化・グラフ化することで、その推移・傾向を学校全体で共有できるようになっていますか?(入試倍率・留年率・退学率・学生満足度・論文件数・科研費採択率・TOEIC 平均・・・等々) 組織の「ありたい姿」「なりたい姿」を明確にし、目標実現に向けて学内が一体となった活動を推進しながら成果を上げるためには、学校全体・自部署以外の達成状況・新たな課題など、これらの共有・共感は非常に重要であると思われます。

回答

委員のご指摘の通り、KPI に対して数値目標を掲げて達成度合いを評価することは重要だと考えます。また、教育機関ということもあり、数値目標の達成を追うということも重要視することが教育の成果につながらないということも考えられます。

様々な KPI に対して、数値目標の設定が適切なものについて検討し、数値目標の設定を行いたいと考えます。

評価項目等	企業との連携について
ご意見 ご質問等 その他	鹿児島高専テクノクラブ(KTC)については、会員企業が常時 100 社を超えるような組織として大きく成長してきました。テクノセンターをはじめ関連する部署・先生方のご尽力の結果であると認識しています。KTC 会員企業の入会目的は何と言っても優れた人材の獲得がメインであり、自組織を PR する地元企業研究会への参加やデジタルサイネージによる告知、工場見学の受け入れ等、地道な活動を通じて学生への認知度を深めながら、地元・会員企業への採用促進(COC+の継続活動)を図っているところです。 近年、こう言った KTC の活動とは別に個別の企業との連携を進められ県内就職者の約半数が連携企業の手グループ企業・工場に就職している実態がありますが、これは学校として意図していることでしょうか？

回答

委員のご指摘のようなことは学校側が意図して生じている状況ではありません。学生の進路については、学生の意思により決定しています。

評価項目等	目標・項目・テーマの設定について
ご意見 ご質問等 その他	昨年は「Well-being」をテーマに高専フォーラムを開催するなど、Well-being の教育志向を取り入れた目標・項目・テーマが設定されるであろうと推測しておりましたが、学校長の指摘にもあるように学校全体にこの志向は浸透していないように感じます。それぞれの学科・全ての教員あるいは学生自ら本テーマに向けた探究を進められる取り組みの必要性を感じます。 また、本テーマに対する探究が進むと「教員・職員の働きがい改革」や「地域における本校の存在価値」「学生の成長と夢の実現」と言った視点でのアクションプランが創出されることが考えられます。

回答

委員のご指摘の通り、Well-being は鹿児島高専の教育施策のテーマとなっています。鹿児島高専としては、Well-being をテーマとしまして複数の施策を行っています。その一例として、1年生混合クラスの導入、カリキュラム編成（リベラルアーツⅠ、Ⅱ等）、男女更衣室の設置、厚生会館の魅力化のための改修、学校環境改善アンケート（学生、教職員）及びその対応、後援会の支援による冷水器の増設等、複数の取り組みを行ってきました。これらの施策をまとめて、学内で共有する機会がなかったため、学内で Well-being 志向の浸透がなされていなかったものと思います。

令和8年度から改組を行い、鹿児島高専がさらに、学生、保護者、地域、企業等にとって魅力ある学校として成長し、本校がテーマとしている Well-being を具体的な教育、課外活動、施設改修に反映させたいと考えます。

また、委員のご指摘の通り、「教員・職員の働きがい改革」や「地域における本校の存在価値」「学生の成長と夢の実現」と言ったアクションプランの創出も今後考えられる課題となります。特に、「学生の成長と夢の実現」については、鹿児島高専 Supporting Students Dreams（鹿児島高専 SSD）を実施しており、具体的な施策として現在取り組んでいます。

鹿児島工業高等専門学校
自己点検・評価報告書 事前質問票
委員名：山口 俊樹

評価項目等	1. 教務主事自己点検・評価報告 (2) 留年・退学に関する対策、 (その他各学科の目標にも記載されております)
ご意見 ご質問等 その他	留年は、やむを得ないと思いますが、(人生経験になる面も) しかし、「卒業することを希望する学生」を、一部の科目が不可であるために退学させることは、避けた方がいいと思っております。 (当方が大学1年生の時の一般教養科目で1科目だけ不可になりそうなのを救ってくれた経験を基に、そう思うものです) (一部に秀でた者は、劣る点がある。全員がジェネラリストである必要はない) (質問①) 学年別の留年数と退学数と、そのトレンドをお教えます。 (質問②) 退学者の中で、本当は卒業することを希望する学生は、どれ位いますか。

回答

令和3から5年度において、留年数の平均は、1年生は1.33名、2年生は6.00名、3年生は10.67名、4年生は10.67名、5年生は4.33名です。退学数の平均は、1年生は0.67名、2年生は0.67名、3年生は3.67名、4年生は2.00名、5年生は1.33名です。留年、退学が多い学年は3年生です。

令和2年度以前は、各学年2回目までしか留年ができず、2度目の留年で退学となっておりましたが、令和3年度以降はこの規定がなくなりました。

そのため本当に卒業することを希望する学生は留年して卒業を目指すことができるため、現段階では、経済的困窮で退学しないといけない学生を除き、退学者の中で卒業をすることを希望する学生はいないと考えます。

評価項目等	6. 国際交流センター長自己点検・評価報告 (3) TOEIC 講座及び試験の実施
ご意見 ご質問等 その他	TOEIC もいいが、せっかく身に着けた英語を仕事で（授業で）使う機会があったら面白いと思います。 （質問①）「プログラム参加者の平均点は学年平均よりも高い。」とありますが、統計的に有意差がありますか。（高専なので、このような質問をお聞きしました。申し訳ありません） （質問②）昨年まで当社社員だった方が、今年から宮崎国際大学の教授に就任しました。この大学の授業は、すべて英語で行うそうです。高専でも、このような「全て英語で行う授業」があったら学生に刺激になると思いますが、いかがでしょうか。

回答

（質問①）

TOEIC のスコアについて、t 検定（有意水準 5 %）より、統計的有意差があることを確認しています。

（質問②）

全てを英語で行う授業は学生にとって魅力的であると考えます。しかし、ある程度、学生の英語能力が高い状態で実施して初めて学習効果につながると考えています。現時点では全科目を英語で行うことは予定しておりませんが、英語で行う科目も増やしていきたいと考えています。

評価項目等	15. 情報工学科長自己点検・評価報告（他の学科でも、同様の目標があります）
ご意見 ご質問等 その他	当方は、大学生の時に、大きな学会から小規模研究会などで、発表する機会がありました。 （質問①）自ら希望する学生を共同研究者のような立場で取り込み、発表してもらったケースなどがありますか。（指導教官にも良い影響があると思います） （質問②）「人手不足のため、平時を超えて担当科目数や卒業研究の受け持ち人数が多くなってしまい、本来研究力の高い教員でも研究時間の確保が難しい状況にある。」 これは、誠に大きな問題であると思いますが、何らかの解決法を模索されていますか。

回答

（質問①）

卒業研究を指導している学生が学会発表することはありません。対外発表に足る成果を得ることができた場合は、教員側から勧めることがあります。実際、2022 年 3 月に、専攻科に進学するわけではない学生（卒業間際の 5 年生：卒業式の後だったかもしれません）が情報処理学会の第 84 回全国大会で口頭発表をしています。なお、情報工学科では卒業研究以外ではそういうことはないと思います。

（質問②）

この問題は教員数確保以外に根本的な解決策がありませんので、教員採用活動に努める以外にないと考えています。そのための「高専教員育成プログラム」です。現状、その効果を情報工学科が得られてないことが悔しいところです。

4. 外部評価委員による評価結果（委員長による講評）

今回の外部評価は、令和5年度に学校が独自に行った自己点検・評価を基に、学校が選任した8名の外部有識者（高等教育機関及び初等中等教育機関、研究機関、産業界、報道機関、同窓会）からなる委員が、評価を行った。

外部評価委員会としての評価結果について、全員の合議による最終的な評価結果としての「講評」を記載する。

【講評内容】

1. Well-beingについて

Well-beingという大きな目標を掲げているが、どういう状態をイメージしているのか、それを明確にし、教職員全員で探求し、イメージを共有していただきたい。KPI等、今後様々な目標を立てられると思うが、それはあくまで今までのWell-beingという状態のイメージの共有、ゴールがあつてからの設定である。個別のKPIの集積ではなくて、コンセプトに基づいてゴールからしっかりKPIを定めて行ってもらいたい。

Well-beingというものを掲げた学校の将来像に対して、全教職員に共感を持ってもらい、腑に落ちることがすごく大事である。その部分があつて、そこから様々な議論の中で共有されていき、色々な目標設定につながってくると思う。大きなコンセプトをしっかり共有することが大事である。

2. 目標設定について

これまで鹿児島高専として、どんな実績を積み上げてきたのか、そしてその上でどういう目標を立てて今後どういう姿を目指すのか。もう少し正しい自己認識に基づいた目標設定や説明が欲しかった。色々と現在こういった目標に取り組んでいますという説明はあつたが、今までどうだったのか、それに対してどの辺が問題だからこうなのだというところが、常に意識されている、共有されていることが大事である。

先ほど自己認識という言葉を使ったが、みなさんがしっかりそれを持っていただき、自分たちが今どういう状態にあるのかを認識した上での目標と言う形で整理していただき、今後の外部評価に意識していただきたい。

3. 積極的な改組について

Well-beingという言葉がそうであるが、最終的に、学生一人一人が在学中に、非常にハッピーに学べるのが目標だと思う。そういう学生の姿を、次の改組の中で色々な制度の改革を通して、実現していただきたい。特に留年への対応、進級や単位のやり方の仕組みはどう考えているか等、他にもいくつか技術的な手法があるかと思う。

学科として教えたいこと、あるいは各専門分野として習得させさせておかなければならないことも、今までの工学の中では一定の形があつたと思うが、そこは発想を転換していくタイミングなのではないか。学生一人一人の学びの充実を第一目標にして、是非積極的な

改組という姿勢で取り組んでいただきたい。そういった思いを委員全員が持っておられたので、是非頑張っていたいただければと思う。

5. 議事要旨

日 時：令和 6 年 6 月 12 日（水）14:00～17:00

場 所：学年横断学科縦断講義室（図書館 2 階）

出席者：上田校長、玉利副校長（教務主事）、岸田副校長（総務企画主事）、北園校長補佐（学生主事）、椎校長補佐（寮務主事）、新田校長補佐（研究主事・専攻科長）、徳永校長補佐（国際交流センター長）、武田校長補佐（地域共同テクノセンター長）、杉村機械工学科長、井手電気電子工学科長、鎌田電子制御工学科長、入江情報工学科長、山田都市環境デザイン工学科長、拜田一般教育科長、佐藤総務企画主事補、谷口総務企画主事補、執行事務部長（併）学生課長、原田総務課長、原田技術長、中村総務課長補佐（総務担当）、柳詰学生課長補佐

陪席者：浦口総務課長補佐（財務担当）、松尾企画室長、川越企画係主任、基島企画係員

記録者：松尾

議事に先立ち、総務課長（進行）から学校側出席者紹介の後、外部評価委員が紹介された。次いで、上田校長から挨拶があった

【委員長（議長）の選出】

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則第 5 条第 1 項で、「委員会に委員長を置き、委員の互選により選出」することとなっているが、学校側から木方委員を候補とする提案があり、全会一致で同委員が選出された。

【令和 5 年度自己点検・評価に関する説明】

岸田総務企画主事から令和 5 年度自己点検・評価書をもとに説明があった。

【事前質問に対する回答】

岸田総務企画主事から外部評価委員の事前質問に対して回答があった。

【外部評価委員による講評】

外部評価委員による打ち合わせを行い、3 点について講評があった。

（Well-being について、目標設定について、積極的な改組について）

【閉会】

木方委員長から本日の議事の進行について協力いただいた旨の謝辞の言葉が述べられた後、上田校長から出席いただいた各委員の方々へ、本校に対しての貴重なご提言・ご意見をいただいた旨、謝辞の言葉が述べられ、外部評価委員会が閉会した。